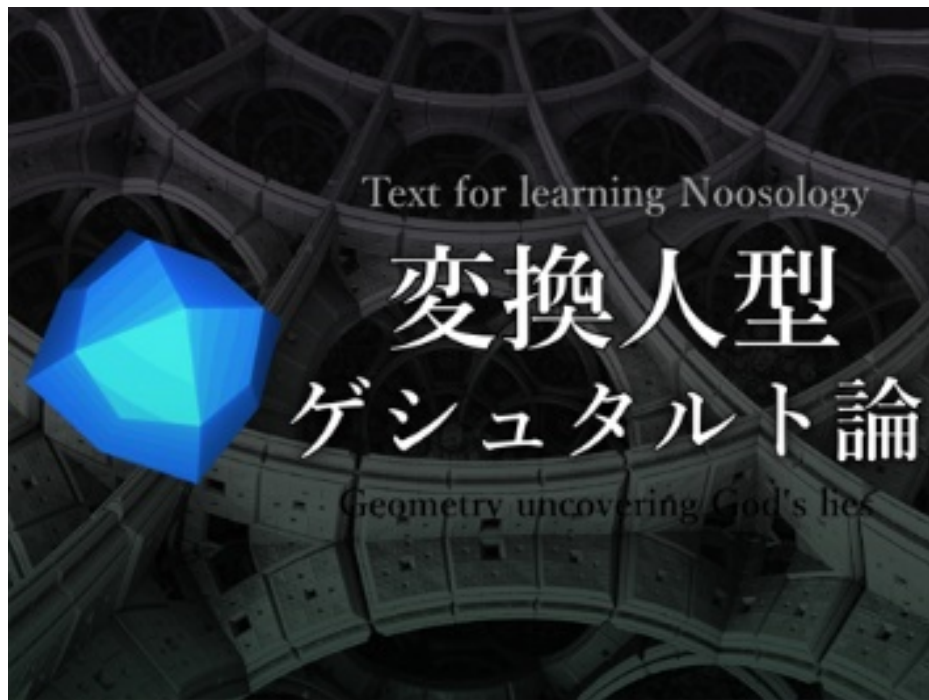




簡易 PDF 分割版

(1 / 4)

目次

1. ヌーソロジーとは？	4
■ 霊性進化論としてのヌーソロジー	5
■ 物質の謎を解明していくヌーソロジー	5
■ あらゆるジャンルを総括していくヌーソロジー	7
■ 「冥王星のオコット」とのチャネリングについて	8
2. 科学の枠外にある存在	11
■ 「無意識」の設定	13
■ 「上位存在」の認知	14
3. 「自己」を見つけるために	17
■ 「他者化」とその逆を行く道	18
■ 科学の枠外にある「自己」	19
4. 影に潜む「精神世界」の文化	22
■ 1995 年から消えていった精神世界カルチャー	23
■ 手段の一つとしてのヌーソロジー	25
5. 冥王星のオコットの目的とは？	27
■ 「シリウス革命」より引用する「オコットの目的」	29
■ 三つの概念の色彩表現	31
■ 内容のまとめ	32
6. 「最終構成」と「変換人」とは？	33
■ 次元変換とピラミッド	34
■ トンデモ情報いろいろなヌーソロジー	36
7. 変換人型ゲシュタルトとは？（前編）	38
■ 物質は宇宙精神の影	42
■ 点の内部に入り込む意識	44
■ 二つの円と回転の関係	46
8. 変換人型ゲシュタルトとは？（後編）	48
■ 主観と客観の関係性	48
■ 自我を解体する道	49
■ 素粒子と原子の秘密	51
9. 基礎用語① 次元観察子と定質/性質など	55
■ 13 の次元ユニット。「次元観察子」について	55
■ 定質と性質	58
■ 反性質と反定質	60
■ 神と人間を繋ぐ道	61
10. 基礎用語② 負荷・反映・等化・中和	63
• 負荷	63
• 反映	63
• 等化	64
• 中和	64

■ 4つの原理と自他関係	64
• 負荷：始まる。ただ自分がある	65
• 反映：受け手がある。相手がある	65
• 等化：俯瞰（ふかん）する者がいる。次元上昇	66
• 中和：第三者の相手。安定する	66
■ ペンタースystemと次元観察子	67
• 新たなる負荷	67
■ 「数は霊である」の文化	69
11. 基礎用語③ ノウス(NOOS)とノス(NOS)	71
■ ヌーソロジーにおける根源的な陽と陰	72
■ 「能動的なもの」と「受動的なもの」	73
■ ヌーソロジー（Noosology）の名前の由来	75
■ 奇数と偶数	75
12. 基礎用語④ ケイブコンパス	79
■ 「 $\psi 1 \sim \psi 8$ 」にある二つの方向性	81
■ 「元止揚」について	83
■ 人間の「思形」と「感性」	85
■ 人間の「定質」と「性質」	87
■ 次元観察子のまとめ	89
13. 基礎用語のおさらい	91
■ 「ヌーソロジー基本概要+（プラス）」のワード	92
■ 「シリウス革命」のワード	93

1. ヌーソロジーとは？

早速だが、まずは「ヌーソロジーとは何か？」について書いておこう。



ヌーソロジーは半田広宣という人物が 1990 年代からずっと提唱しているものであり、一言で言うと「思想」とか「哲学」とかに該当するものである。

「～ロジー」とは「～学」という意味なので、学術的に追及していきたいものでもある。

コウセンさんの Twitter 上の説明だと「ポスト科学主義の宇宙論」「物質と精神を空間的視点から統合する具体的なアイデア論です」などと書かれているが、なんとも説明が難しい。

「ポスト科学主義」とは「科学の後に来るものを考える」ということである。
我々が今見ている世界は、ニュートン物理学をベースにした科学的なモノの見方や、全てが原子のような粒でできた物質であるという唯物論的な見方が基本となるが、ヌーソロジーはそうした科学に基づくモノの見方から、我々が見ている世界の認識を変えるための哲学みたいなものを打ち出していく。
また、「宇宙論」とは、宇宙全体にある事象を科学とは違ったアプローチで説明しようとするものである。

「物質と精神を空間的視点から統合する具体的なアイデア論」
・・・というのはなんとも難しい言い方だけど・・・
これは要するに物質・精神・空間について捉え直して考えるということである。
精神とは？意識とは？空間とは？物質とは？を明らかにしていき、
人は何故生きて、どこに向かっていくのか？の謎を解いていくのがヌーソロジーだとも言える。

■ 霊性進化論としてのニューソロジー

ニューソロジーは発想的に「**霊性進化論**」というものに近い。

霊性進化論とは、19 世紀にヘレナ・P・ブラヴァツキーが立ち上げた神智学で盛り上がった思想であり、現代に伝わるスピリチュアルもそうした潮流から出てきている。



霊性進化論では、まず「**魂**」のような意識があることが前提となる。

魂は肉体だけに留まるものではなく、

人間の意識は肉体に完全依存して存在しているわけではないとする。

また、魂はこの世界だけにとどまるものではなく、

人智を超えた大いなる宇宙のシステムがある中で動いている。

さらに魂は「**霊性**」というものを持ち、人間を越えた存在へと進化することができる。

以上のことを大前提とするものが霊性進化論であり、

ニューソロジーもそれに近い発想で理解していった方が良い。

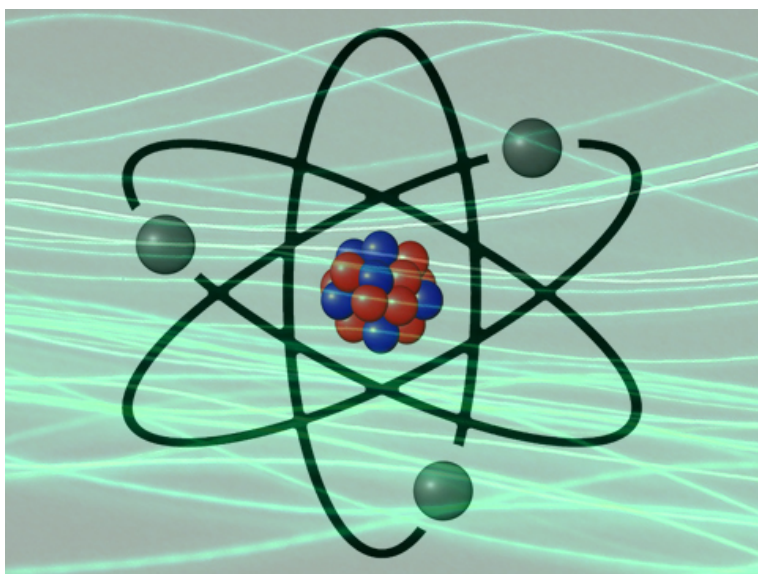
ただ、ニューソロジーの場合、「**魂**」や「**肉体**」が存在している仕組みが従来のスピリチュアルとは少し異なるので、その辺も突き詰めていくと面白い。

■ 物質の謎を解明していくニューソロジー

それから、ニューソロジーでは「**素粒子は正体は、我々の意識だった。**」ということが言われている。これも中核に近い。

スピリチュアルや霊性進化論のような分野に通じていながらも、

量子論や量子力学の内容に入り込んでそれを説明しようとしている。



東洋思想やスピリチュアルで言われていることに、
量子力学の発想を導入することはそう珍しくはない。
1975 年にフリッチョフ・カプラによる『**タオ自然学**』という書籍がアメリカで出版され、
現代物理学と東洋思想の関係について書かれたものが世界的ベストセラーになった。

〔書籍：F・カプラ『**タオ自然学—現代物理学の先端から「東洋の世紀」がはじまる**』（1979）工作舎〕

それからというもの、「ニューサイエンス」というジャンルで様々なことが語られるようになっていき、実用的な量子力学とは別ジャンルで、量子論を解釈するための哲学の話が盛り上がっていった。

ただ、ニューソロジーの場合はやたらと本格的である。
波動関数や不確定性原理の謎に挑むだけでなく、電子やu クォーク d クォーク、ボソンやフェルミオンといった素粒子が、人の意識にとってどういう意味を持つのか？
さらには、 $U(1)$ 対称性や $SU(2)$ 対称性、ヒルベルト空間といった用語まで出てきて、
物質・精神・意識・空間との関係について探っていく。

この辺の本格的な所はまだよく分かってない人も多い。
ただ、肝心な所は、**我々の意識には「カタチ」と呼ばれる何かしらの構造があることである。**
つまり、ニューソロジーを実践的に取り組み、意識にはカタチがあることが分かれば OK であり、それを『**変換人型ゲシュタルト**』と呼ぶ。

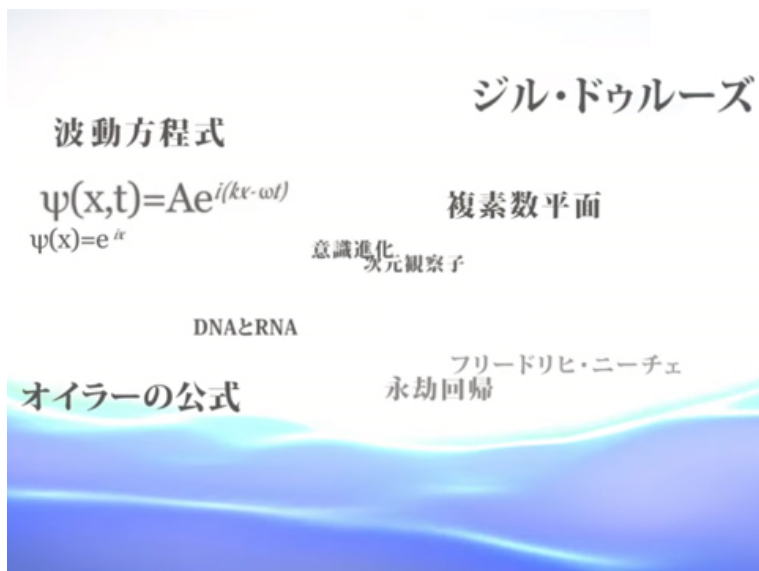
意識のカタチを後付けで説明するために量子力学の専門知識が必要だが、
モノの見方を変えるのに量子力学の細かい知識が必須というわけではない。

ヌーソロジーで大事となるのは、
自身が見ている空間を、従来とは違うモノの見方で捉えていくことである。

■ あらゆるジャンルを総括していくヌーソロジー

ヌーソロジーは、霊性進化論やスピリチュアルに近い発想を持つことに加えて、
ポスト科学主義ということで科学について考え、現代物理学についても本格的に考えていく。

そうした中で、ヌーソロジーはとにかく色々なジャンルに繋がってくる。



例えば、自身の目の前に広がる物質世界は、自身の意識の反映なんだと解釈すると、
「引き寄せの法則」みたいな発想にも近くなってくる。

肉体とスピリットの関係について考えると、
身体の話も大事になってくるし、健康の話も大事になってくる。

自身の精神について理性的に考えていくと、哲学になってくる。
半田広宣さん自身がドゥルーズやベルクソンやハイデガーといった哲学者に傾倒しているので、
ヌーソロジーはそういう印象も強いかもしれない。

スピリチュアルや東洋思想の在り方を研究すると、
宗教の在り方や古今東西の文化についてが絡んでくるし、
科学や量子力学を研究すると、最先端の技術についてや理系的な思考が絡んでくる。
さらには、そこから生き物の意識や人間の身体についての話になると、生物や進化論の話が絡んでくる。

だから、ヌーソロジーをやっていると非常に多くのジャンルが絡んでくるので、
それら多くのものを総括し、統合するように扱っていくのがヌーソロジーだとも言える。

ヌーソロジーをやる人は、各自でそれぞれ専門分野や切り口を持っていて、そこから色々な教養を持つことになっていく人が多い。

■ 「冥王星のオコット」とのチャネリングについて

ヌーソロジーとは何か？を語るためには、
その出自がチャネリングであることも語らねばならない。

チャネリングとは何か？

おさらいすると「高次の霊的存在・神・宇宙人・死者などの超越的・常識を超えた存在、通常の精神（自己）に由来しない源泉との交信法、交信による情報の伝達」・・・などと説明される。

なかなかアヤしい行為だが、

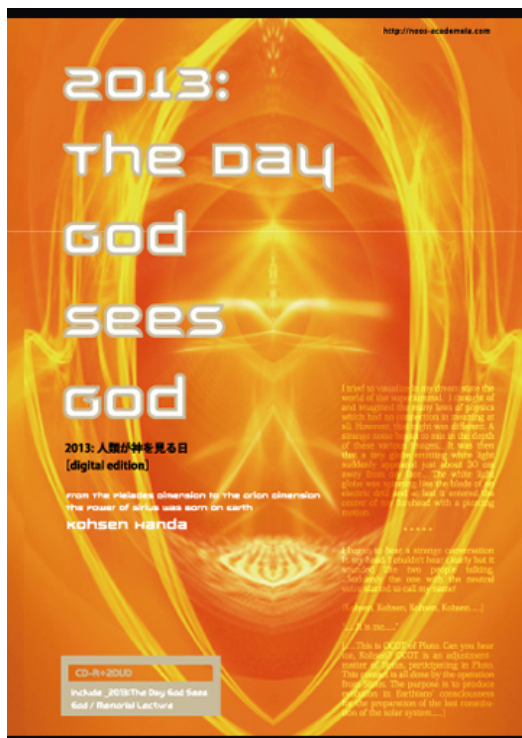
アメリカで1980年代に隆盛した「ニューエイジ運動」の中で使われるようになった名称らしい。

コウセンさんの場合、約1989年～1995年にそれがあり、

『冥王星のオコット』と名乗る存在との交信があったらしい。

（その体験の詳細は『[2013:人類が神を見る日](#)』に書いてある）

[リンク：2013：The Day God Sees God [digital edition] _ NOOS ACADEMEIA online shop]



※CD ブック版の「試し読み」でもその内容の初めの方がそこそこ読める。

最近、動画でその様子を分かりやすく表現して説明する人も出てきた。

（『令和 TV』のニコラス・ユウジさん）

〔Youtube 動画：冥王星 OCOT から送られてくるシリウス言語にチャネリングした人〕

こうしたチャネリングが引き起こしたスピリチュアルムーブメントは、
だいたいはアメリカが中心となっていて、そこから広がることが多い。

特に、ダリル・アンカによる『**バシャー**ル』が有名である。

バシャーもまたチャネリングソースとして、「自己の望むことをしよう」「自分の好きなことをしよう」「ワクワクすることをしよう」などのことを言う方向性で人気を得て、日本にも伝わるようになった。

スピリチュアル系のものは総じてそうした方向性のものが多い。

そうした中でも『冥王星のオコツト』の語る内容は、めちゃくちゃ特殊であった。

『シリウス言語』と呼ばれる独自用語を使いまくる宇宙人で、

その内容を解読するためにはかなりの知性と根気がいる。

そのため、コウセンさんはバラバラな状態で提供されたパズルをひたすら解くような作業をしないと解読できなかったらしい。

1989 年～1995 年の間はずっとその情報と向き合って記録し、

今でも残された情報でそれを解読しているわけである。

——人間の定質と地球の定質とは違うのですか。「金くちがいます。」——どちらが次元が高いのですか。「地球の定質の方が方向性が上にあります。」——地球にも意識があるのですか「勿論あります」——意識とは何ですか？「人間の意識とは人間を意識させられている力の元にある姿。人間に成る為に意識を交替化する力を持つ内面性の姿。それが人間」——性質とどう違うのですか「性質とは意識を方向づけるもの」——人間における定質の交替化はなぜ起こるのですか。「人間が人間を交替化するために必要なものです。——それは上次元からの調整作用なのですか。「そのようにとられてよいでしょう。」——オリオンとはオリオン星座にある恒星と何らかの関係があるのか「あります。当体の性質です。当体とは人間の意識の持つすべて」——他の星も当体ではないのですか「他の星は他の次元に干渉しています」——意識とは何ですか？「人間の意識とは人間を意識させられている力の元にある姿。人間になるために意識を交替化する力を持つ内面性の姿。それが人間。」——では、過去のこの次元の地球において位置の転換を果たした文明があった数多くあったという事ですか「そのとおりです」——それで、その時、位置の転換ができなかった人間だけがこの地球に取り残されつづけているのですか「そう考えられて結構です」——では、今の人類はその人間達の子孫にあたるのですか「はい」——日本人とは何ですか「今の人間の核質です。位置の転換はほとんどがこの核質によって行われています。」——ヒトとは何ですか「新しい力を持つ人間」——ヒトとは太陽人という意味ですか「ある意味では、そういう言い方ができるかもしれませんが。」——ヒトにとって人間の悲しみとはどのように見えるのですか「意味をもたないもの」——では、ヒトの喜びとは「有機体の負荷」——ヒトの上にも次元があるのですか「無限にあります」——オリオンの上にも次元があるのですか「オリオンは大きな意識における点質です。上の次元はありません」——あなたがたはヒトの上の次元の存在なのですか「ちがいます。わたしたちはヒトとは違う意識に存在するものですから、くらべることはできません。」——円運動とは何を意味するのですか「膜を作る」——何の膜ですか「位置を変えていくことのできるものを作る膜」——無数の次元が存在しているのか 僕らは何をするのか「救いをみつけるための手段をもたらず」——何を救うのか「この地球における存在の意味を考えるための救い意識に変化を与えるための救い」——今は意識に変化がないのか「今は少しある」——いずれなくなるのか「なくなるというより変化を送れなくなる意識が変化を求めている」——

※その内容の片鱗は『[シリウス・ファイル公開所](#)』や『[オコツト情報原文 bot](#)』に載せてある。

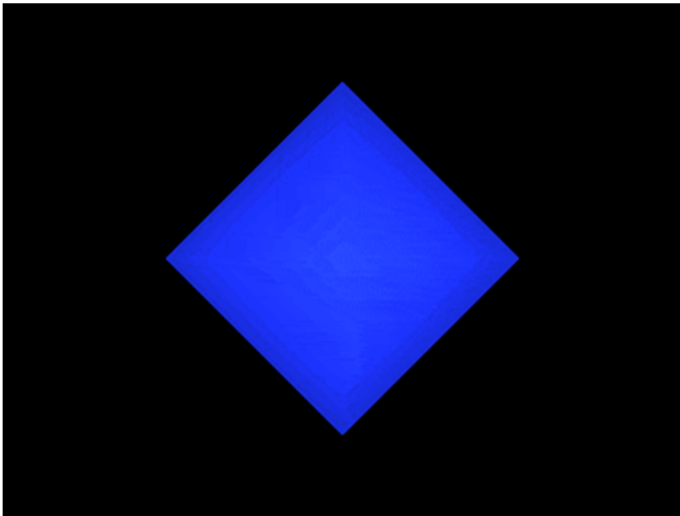
先も書いた「素粒子は正体は、我々の意識だった。」といった内容も、

『冥王星のオコツト』が伝えてきたことである。

他にも、あらゆる数や図形と意識の関係も、オコツトは伝えてきた。

以下にある「正八面体」と「正六面体」の意味についても伝えてきた。

(これはこのシリーズのシンボルとする。)



〔アニメーション：「正八面体」と「正六面体」のモーフィング〕

そんなオコツトのチャネリング情報はとても**数学的で幾何学的**という印象であり、
ヌーソロジーの内容もそんな感じである。

だからヌーソロジーに惹かれる人は、数学に惹かれて来る人が多い。

その一方で、学術系というよりはむしろシャーマン系の人がよく来るし、
人間の身体について詳しい人や、スピリチュアルに通じてる人なども来る。
そうしたものに**数学的な説明**が欲しい人とかがよく来るのがヌーソロジーの特徴である。

さて・・・

そんなシャーマニックで**数学的なヌーソロジー**について、これから説明していく。

そして、ヌーソロジーの肝は『**変換人型ゲシュタルト**』というものを理解していくことなので、
その説明を中心にすべく『**変換人型ゲシュタルト論**』というタイトルにした。

2. 科学の枠外にある存在

ヌーソロジーについて語っていった、できれば広まって欲しいものだけど・・・
なかなか流行らせるのが難しい（笑）

ヌーソロジーが受け入れられづらい理由について考えると、
内容が哲学・数学くさくて難しいというのもあるし、
語り口の難しさから親しみづらい理由も色々あるけど・・・
冒頭でも書いたように、**シャーマン系の人が多く来る**といった理由もある。



シャーマンとは何か？

古代から超自然的な存在と交流する役割を持っていた者。

死者との交流すら可能と言われる者。

あと、「あの世とこの世と繋ぐもの」とか言われたり、

古今東西で職業として存在することもある。

日本だと**巫女**が該当し、

神社にいる者は本来そうした役割を担っている。



ただ、現代だと「そんなのほんとにあるの？」と言う人も多いだろうと思う。

そもそも、人類が世界を科学的に捉えるようになったのは
ニュートンやデカルトが登場した 17 世紀あたりが始まりで、
日本では 19 世紀に黒船がやってきてからなので、
人類史的にはシャーマニズムで生きてた期間のがずっと長い。

まあしかしながら、生まれる前のことなんて我々は体験してないし、
科学的なモノの見方のが安定しているから、
それが当たり前なのも自然っちゃ自然である。

シャーマニズムは、科学で証明されていない現象について扱うもののため、
必然的に「**科学の枠外**」の世界についての話が出てくる。
つまり、これを追求するためには科学の枠外に行かなければならず、
そうしたものが現代ではなかなか受け入れられていないのが問題となる。

こうした**科学の「壁」**を突破しなければならないのがヌーソロジーであり、
現代社会の限界もそこにあるとする。

また、そもそもヌーソロジーの出自は「チャネリング」である。
チャネリングはシャーマンのスキルの中で上級編みたいなので、
高次の霊的存在・神・宇宙人・死者などの超越的・常識を超えた存在との交信といったら、そのまんまシャーマンがやってることと同義である。
シャーマンがやることはチャネラーがやってることだし、チャネラーがやることはシャーマンがやってることである。
ヌーソロジーを信じること自体、そういうものを「アリ」とするのが前提となる。

こうしたものを扱わなければならないことが、ニューソロジーの難しさの一つになっている。

（ニューソロジーをやるなら、チャネリングを行うことも必ずやらなければならない。・・・というわけではないが、それに通じた意識を持つ必要性は出てくるかもしれない。）

■ 「無意識」の設定

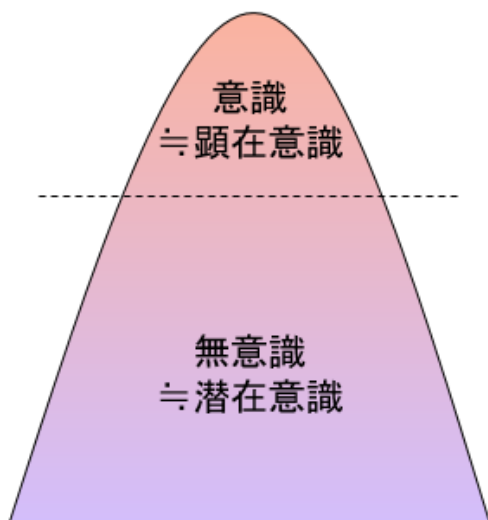
「科学の枠外」や「シャーマニズム」と非常に接点のある分野がある。

それは「無意識」！

「無意識」について扱う学問、心理学などは、掘り下げていくとだんだんと不思議な領域になってくる。

人間には「意識」と「無意識」がある。

言い換えると、普段浮かんでいる意識は「顕在意識」で、沈んでて認識できないものが「潜在意識」。これは精神分析学とか臨床心理学とかでよく出てくる概念である。



歴史上、「無意識」について始めて精神的に注目したのはジークムント・フロイトらしい。

19世紀から20世紀にかけて活躍し、精神分析学の創始者とも言われるフロイトは、

患者が無意識へと抑圧している悩みは、人間が夜に見る「夢」の中で表れてくることに着目し、「夢分析」を臨床治療の主力としていた。

それから、フロイトは無意識の根底には「リビドー」があるとした。これは分かりやすく言うと「性的エネルギー」として説明される。もっと俗っぽい解釈だと「性欲」である。

フロイトはとにかく「性」という分野にこだわっていた。

「人間の悩みの原因は全てリビドーから来る」と言い切るくらいこだわっていた。

この言説は今でもフロイト派の人に伝わっている。

これは一理あるような気がするけど・・・だいふ問題視もされていた。

(ちなみにその背景には、キリスト教によって過剰に性を抑圧する文化があったとも言われている。)

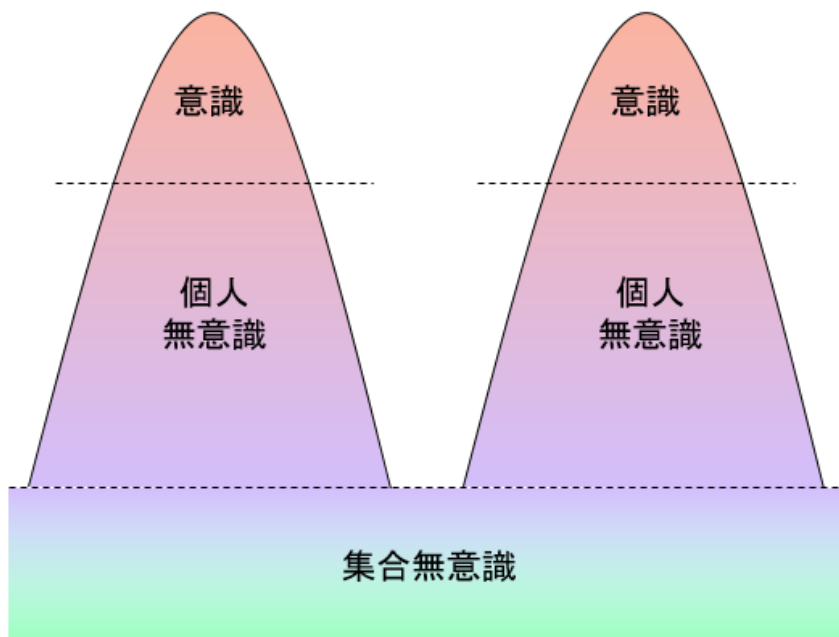
フロイトの弟子であり、後に決別した**カール・G・ユング**は、

「無意識」と「夢分析」に挑む姿勢に共感し、フロイトの傘下に入った。

ただ、ユングは後に人間の無意識には個体が持つ「個人無意識」だけでなく、

「**集合無意識**」があるということを言いだした。

そもそもフロイトとは全く違った発想を持っていて、それが原因で必然的に離れるようになった。



「集合無意識」とは、別々の人が共有する無意識のことを言う。

つまり、**肉体上は別に見える我々でも、無意識では繋がっている領域がある**ということである。

これは科学的にはあり得ないことだ。

しかし、オカルトだとそれがあり得ることになる。

最初から「科学の枠外となるもの」を追っていくものがオカルトだからである。

したがって、ユングはオカルティストとして有名で、

アカデニズムの世界ではほとんど嫌われているが、オカルトの世界では好まれている人物になっている。

■ 「上位存在」の認知

科学の枠外を意識する時、

必ず出てくるのは「**上位存在**」みたいな存在である。

高次の霊的存在・神・宇宙人・超越的存在・・・

どう呼ぶかは人それぞれだが、

チャネリングでそうしたものとアクセスするということは、
そうしたものが実際に存在するということである。

科学的に言うと、道具を使う人間達に勝てる野生動物はいない。
人間はさらにテクノロジーの発展によって、異常なほどに強くなることができた。
野生動物を武力で制圧できるからこそ、人間の文化は守られている。
だから、地球を支配しているのは人間ということになっているし、
人間がこの世で一番頭が良くて強い動物だと言える。
だから人類はこの世にあるものを全て支配すれば幸福になれると錯覚する。

しかし、これはあくまで唯物論で考えた場合の話である。
科学の枠外にもし「上位存在」があった場合、その前提が覆る。
人間より優れた存在が科学の枠外にいるかもしれない・・・



ここでは分かりやすく便宜上「上位存在」という言葉を使ったが・・・
人間が「上位」という言葉を使うと、必ずその存在に支配されるイメージを浮かべてしまう・・・
そのイメージが正しいかどうかは怪しいが、とにかく科学の枠外に何かしらの存在があることを認める必要がある。

ニューソロジーではそうした存在がいる領域を『シリウス』と呼ぶ。
一方で、我々がいる領域は『プレアデス』と呼ぶ。
「シリウスにいる存在が偉いものであり、それに比べて我々は愚かなのだ。」・・・とは別に思わなくても良いんだけど、
敬意を以て接する必要があるのかもしれない？

ヌーソロジーの出自となる『冥王星のオコット』は何をしに来たかという、
『シリウス』についての情報を伝えてきた。

オコットが言うには、シリウスには『ヒト』と呼ばれる存在がいるらしい。
そして、プレアデスからシリウスへの移行の時に出てくるものが『変換人』と呼ばれる存在らしい。
それは両者の橋渡し役的な存在のようである。

俗説だと、上位存在のイメージは、西洋だと天使とか聖母とか、仏教だと菩薩とか如来とか、
時として偉そうでいけすかないイメージが出てくることもあるが、
ヌーソロジーの場合は『ヒト』や『変換人』である。
偉いのかどうか分からないワードなのがとてもグッドだと思う。

ヌーソロジーではそんな『シリウス』や『変換人』という、
未知なる存在について知っていく必要がある。

人間が「上位存在」というワードを意識すると、
「それは偉い。」と思う者がいるし、
「それは我々を苦しめるものだ。」と思う者もいる。
そして、それを「神」と呼ぶ者もいる。
そこが大きな問題であり、
古代の学問にあった「神学」ではそれがよく研究されていたし、
西洋の哲学でもずっとそれは重大なテーマになっていた。

じゃあ「神」とは何か？という話になる。
どうしてもその問題が出てくる。
人々が「神」という言葉を嫌悪するのは、だいたい宗教のせいである。
これまでの歴史上、あまりにも間違った宗教が多過ぎて失敗することが多かったからだ。
しかしながら、宗教は色々あるものだし、宗教は人間に必要なものである。
それも認めなければならないし、「神とは何か？」という問題にも挑まなければならない。
それは旧約聖書に出てくる創造主のような神であり、全てを司る万能な神であり、人間に試練を与える神
・・・というわけではなく、神にも色々いるし、日本は八百万の神を信じる多神教の国である。
それらを踏まえた上での「神とは何か？」が大事になる。

ヌーソロジーの初の著作は『2013:人類が神を見る日』であるが、
ここで言う「神」にはそういう意味が込められていると言っても良いと思う。

3. 「自己」を見つけるために

ヌーソロジーとは何か？という問題に対して、
シャーマニズムとか、数学に惹かれる人がやるものとか、これまで書いていった。

もう一つ言われていることは、ヌーソロジーは「自己×他者」の問題について考える「自他論」だということである。

ヌーソロジー学習で肝となるのは「自己」である。
これは我々が持っている意識について考える際も肝となってくる。

デカルトが自著『方法序説』の中で書いた
「我思う、ゆえに我在り」という言葉が有名だが、
「我とは何か？」となると、実はとても他者の影響を受けやすい。

普段の我々は意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。
というかそもそも、実は人間の意識はそうなりやすいようにできている。

理由の一つは、**幼児から成長する際の意識形成の問題**である。



人間は幼児の段階ではただ漠然と光景を認識する所から始まっていて、
だんだんと成長するにつれて、物と自分の境目が分かってきて、
自分の身体についても漠然と分かってきて、
さらに「他者」という存在がいるのが分かってくる。
それから、「他者からの視線」をベースに「他者にとっての自分がこうだろう」というイメージから「自分はこうだろう」という意識を確立していく。

人間の成長における意識形成のベースが「他者からの視線」になっているから、人間は他者の影響を受けやすいようになっているわけである。

もう一つは**集団行動の意識**からそうなる。



人間の最大の長所は社会性を持っていることで、集団行動によってその成果を発揮する。単一の個体だったら勝てない野生動物がいっぱいいるので、集団でいることが生きていくために大事となる。集団でいるには社会性を持つて必要があり、社会性を発揮するためには、常に他者の視線や他者の考えに合わせて生きることを意識していかなければならない。これはちょっと考えれば分かることだし、なんとなく生きていてもそうなってくる。

さらには「言語」がそうした意識を膨張させていく。言語もまた人間の最大の長所と言える能力であり、人間はこれによって社会性をさらに強固にした。ちょっとした鳴き声による意思伝達程度であれば野生動物でも可能である。しかし、人間は言語によって物語を作り、さらにその作られた物語に対して没頭して、そこに自身の魂を置くことができるほどに、言語に依存することができる生き物である。

以上のように、人間がどれほど他者の言葉の影響を受けやすい生き物かは、あらゆるエピソードを思い返せば理解できるだろう。特に受動的に生きているほど「他者の要求を受ける存在＝自分」となってしまうのが人間である。

■ 「他者化」とその逆を行く道

そして、完全に他者になりきるように、他者みたいな存在と自分が同一化することを「他者化」という。

特に人間は集団で生きていくと他者化していく。

戦士、アイドル、軍人、性奴隷、社畜サラリーマン、コミュカお化け、金儲けの権化・・・・・・
よくあることなので、考えると思い当たる人は多いかもしれない。



けど、他者化している人は、同時に「他者の助けになってる人」であることも多いので、
実はみんなにとっては優秀に評価される。そこが人間社会の難しい所でもある。

ただ、ニューソロジーは「他者化」とは逆方向の自分を探っていかなければならない。

自分とは何か？

そして、自分の中に奥深くに潜む、確かなものを「自己」と呼ぼう。

そうすると、自己とは何か？

この問題は実はすごく難しい。

それを探していくためには、「無意識」まで探るしかない。

しかし、普通の人が無意識を探ると、

「他者から植え付けられた意識」ばかりが出てくるものなので、

本当に自分固有の意識を見つけるのは難しい。

無意識を探るのはすごく難しく、

掘れば掘るほど深かったから、ユングは「集合無意識」を発見したし、

それを正解とするしかなかったのである。

■ 科学の枠外にある「自己」

ニューソロジーにおける自己探求に必ず必要なのは、

科学の枠外にある「自己」を探ることである。

無意識を掘り下げていった先にある、科学の枠外にあるレベルの「自己」は、ほとんど「集合無意識」の領域にまで近くなる。
だから自己探求の話はシャーマニズムの話にまで繋がってくる。

こうした科学の枠外にある自己を「**Spirit Self**」と呼ぶことにしよう。



「Spirit」は、精神とか魂とか、
（物質や肉体に対義語として）霊的な心みたいな意味である。
Spiritに「ual」がつくと「Spiritual」となり、「精神上の」とか「精神的な」みたいな意味になる。
日本語の「スピリチュアル」はかなり俗物化してしまったワードだが、
元々は純粋にそうした概念を追っていくものである。

それから、「Self」はユングが使ったワードで、
個体を持つ意識・無意識の全体を踏まえて、
その全体の中心に存在する「自己」のことを言う。
それらを合わせて「Spirit Self」である。

ヌーソロジーをちゃんとやると、自然と「Spirit Self」を探す作業になる。

「Spirit Self」が掴めない人は、ヌーソロジーを理解するのが難しいので、
まずは先に自己探求をひたすらやった方が良くかもしれない。

自己探究のジャンルとなると、瞑想とか、自分探しの旅だとか、
ひらすら内に向かって読書をするのとかが有意義となる。
「占い」とかも有意義だと言える。

欧米で流行っている「マインドフルネス」みたいな発想も良いかもしれない。
仏教で悟りを開く時の境地に近い「常に落ち着いた状態」が「サンマ・サティ」と呼ばれていて、それがアメリカで普及してできたのがマインドフルネスである。
他者化しやすい西洋社会でありながら、東洋の思想が注目されていて、その発想が瞑想からビジネスにまで幅広く応用されている。

しかしながら、あまりビジネス利用ばかりに向かい過ぎると本筋から逸れてしまうため、その点も注意が必要である。

あくまで重要なのは「Spirit Self」の発見である。

人はつい他者依存をしてしまう生き物である。
人がどうしても他者依存をしてしまうのは、不安があるからであり、どうして不安があるかというと、その原因は自身の家庭の問題や、育ってきた環境の問題にまでさかのぼるかもしれない。
あるいは、認知の歪みや思い込みから、考えが偏ったり不安になったりすることもある。
それらは後天的なものから来てるかもしれないし、先天的なものから来てるかもしれない。
そうすると、そうした分野専門の心理学が必要になってくる。
安定した自己を確立するにはまずはそっちが大事なので、そっちをしっかりやるのも良いかもしれない。

逆に言うと、「自己」が確立していて、「Spirit Self」が直観的に分かっている人は、ヌーソロジーを理解するのが容易いかもしれないとも言える。

そして、ヌーソロジーがはっきり分かるようになると、
「Spirit Self」の感覚が強固になるし、確信が持てるようになる。

「自己」を探るのは、掘れば掘るほど深くなっていくぐらい難しいものだが、それを可能にするための知恵として利用できるものが、ヌーソロジーだと思ってもらいたい。

4. 影に潜む「精神世界」の文化

ヌーソロジーを語る以前に大事なのは、

ヌーソロジー以外で「科学の枠外にあるもの」を探求するジャンルの存在である。

アメリカでは 1980 年代頃から「ニューエイジ」という言葉が出てくるようになった。

ニューエイジとは、物質的世界によって見えなくなっている神聖な真実を目指すものだったり、個人の霊性・精神性の向上を目指すものだったり、宇宙・自然・生命などの大いなるものとつながろうとしたり、地球や自然を愛するものだったり・・・

・・・と、非常に多様な思想を含みながらも「新しい時代」を目指すものである。

こうした潮流は 1960 年代から既に始まっていたと言われていて、

アメリカで起きた「ヒッピー・ムーブメント」もニューエイジの潮流の一種とされる。



そうした潮流の元となるのは、ヘレナ・P・ブラヴァツキーが 19 世紀にアメリカで立ち上げた神智学協会だと言われている。

神智学のベースとなる思想は、古代からあったキリスト教・仏教・ヒンドゥー教・エジプトなどが持つ神秘主義思想を総括したものだが、ブラヴァツキーによってまとめられたものの影響は非常に大きい。

神智学協会が広めた「心靈主義（スピリチュアリズム）」や「霊性進化論」は、「新しい時代」に必要なものとして現代的にアレンジされつつ、世界中に広がっていった。

そして、日本にもそうしたものが伝わるようになり、

それが 1980 年代のオカルトブームへと繋がり、

「精神世界」という言葉ができて、書籍のジャンルの一つとなった。

ヌーソロジーも一言で言うと「精神世界」のジャンルにあるものにカテゴライズされる。

この辺についての色々は『サイキックの研究と分析』シリーズでも書いたので、そっちを読んでもらいたい。

〔リンク：■サイキックの研究と分析(32) ～1980年代は精神世界のジャンルが流行っていたらしい～ | 哲学思考のなれの果て〕

「ニューエイジ」や「精神世界」で目指すものは、大体「オカルト」で目指すものにも近いと言っても良い。そもそも、オカルト (occult) というワードは、本来「隠されたもの」「目で見たり触れたりすることができないもの」を指すものである。神秘思想や西洋魔術の文脈の中で「オカルト」と言った場合、それは科学の枠の外にあるものであり、一神教（特にキリスト教）が排除した思想であり、秘教的な知識体系のことを指したりする。それらは一般的には分かりずらく、隠れやすいから「オカルト」と呼ばれているわけである。ヌーソロジーでやることもそうしたものを探る作業だと言っても良い。



ただ、日本で俗に言われている「オカルト」というワードは、幽霊とか怖いものだったり、怪しげなものだったり、不気味なものを扱う言葉になりつつあり、本来の意味とは離れがちになっている。

（一方で「カルト (cult)」というワードは「崇拜」を意味し、胡散臭いものはそう呼ばれている。）

オカルトが本来の意味と離れつつあることを危惧しつつも・・・その本質について探っていくべきである。

■ 1995 年から消えていった精神世界カルチャー

1960年代はアメリカではヒッピームーブメントの全盛期となっていて、その後はそれが落ち着いたものの、1970年代もその影響は残っていて、1980年代も日本では精神世界カルチャーが流行っていて、90年代前半までは続いていた。



日本でそうしたカルチャーが消えた明確な理由としてよく挙げられるのが、**オウム真理教**による無差別テロ事件であり、1995 年の地下鉄サリン事件と教団逮捕によってその終止符が打たれることになった。精神世界カルチャー全般はそれ以降、一気にやりずらくなってしまった。

オウム真理教の教えの内容も見ても特徴的である。

「オウム（aum）」という神聖な言霊を重視したり、
クンダリーニヨガを用いたり、
人間は神人と獣人の二種類に分かれるみたいなことを言ったり・・・

別に悪い発想ばかりではないのだが、
神人が善で優れていて、獣人は悪で劣ってるものとしてしまった。
オウムという特定の言葉を唯一神聖なものとして使い過ぎて、具体的な人物＝教祖を神と同一視してしまった。

あと、クンダリーニヨガの扱いに問題があっただろう。一番上のチャクラ（クラウンチャクラ）ばかりを開発すると、地に足がつかずに膨大妄想に行き過ぎて破滅することは、ちゃんとした専門家ならよく知っていることである。

とにかく、宗教の悪い所ばかりが暴走していき、
普通の人間を悪と思うがままにテロにまで発展してしまった。

ただ、クンダリーニヨガが悪いわけではないし、
オウムという言霊自体は悪いものではないし、
人の中に神性と獣性を見出して区別することは悪いわけではないし、
神々の世界を信じて知ろうとすることは悪いわけではない。

我々はあの失態から学びながらも、
そこで本当に目指すべきものは何なのか？を見つけるべきなのである。

■ 手段の一つとしてのヌーソロジー



ヌーソロジーの目的を簡潔に言うと・・・

唯物論的価値観から離れて、科学の枠の外にある世界を目指す。

そこにある上次元の意識と接続することを目指す。

ヌーソロジーではそれを『シリウス』と呼んでいる。

・・・といったことに集約される。

まあこれはあくまで簡潔に言った場合の話であるけど・・・

そこに至るプロセスは、知れば知るほど味わい深い、独創的で膨大なものとなっている。書籍を読むとそれがよく分かってくる。

あと、よくよく知っていくと応用方法が色々あることが分かってくるし、オコツトは割と人間好きなので、人間の生き方も良いものということで、何でも良いことが分かってくる。

それから、上記ではあくまで上次元の意識と「接続することを目指す」と書いた。

「行ったら終了」みたいに「行くことを目指す」とは書いてない。

人間として生きてる限りは人間の意識は持ち続けて生きることになるし、

シリウスに行ってすぐ終了とはならない。(そりゃそうだ)

あと、接続して繋がった後にどうするかは具体的には決められてない。

そこは各自の自由と言っても良いと思う。

ただ、とりあえず繋がっておけば、何か創造的な生き方をしたくなるかもしれない。

ヌーソロジーで大事なものは、あくまで「自己主体で能動的に。」である。

そうして能動的に生きていくと色んな道が開けてくるし、

そもそもオコツトは人間の生き方を否定しているわけではない。

それを踏まえればなんでもありだし、ヌーソロジーをちゃんと知れば知るほど、あまり否定的な感情は起きてこない。実はなんでもありのような気もしてくる。

そして、そうしたシリウスのようなものを目指すような思想は、古今東西を探せばたくさんある。

それらに通じるのが「精神世界」や「ニューエイジ」のジャンルなわけである。

自分（Raimu）は、それらのジャンルに興味を持って、

あらゆる方法を探って行って、自分なりに考えた所、

以下の4つの手段にまとまると思った。

- ・ 体育系的
- ・ 人文系的
- ・ 理数系的
- ・ 芸術系的

1番目は基本である身体を重視するアプローチ。2番目は心を重視するアプローチで、言葉やコミュニケーションも大事になってくる。4番目は芸術による表現と、技術の研鑽である。

そして、3番目である理数系のアプローチを支えるに相応しいのがヌーソロジーなのだと思う。

幅広い手段がある中でも、ヌーソロジーは数学・物理学・幾何学方面で非常に優れた情報を持っている。

『冥王星のオコツト』がもたらした情報を元に、半田広宣さんが苦労して作り上げた知識体系がそうしたものになっている。

なので、精神世界カルチャー的なものにも興味を持ちつつ、

理系的な力に魅力を感じる人は学んでみて欲しい。

5. 冥王星のオコツトの目的とは？

さて、これまで変換人型ゲシュタルト論シリーズを(1)～(4)まで書いていった。

これまでのものは「ヌーソロジーとはどのようなものか？」を説明するためのテキストで、いわば導入編みたいなものである。

ここから先はいよいよ本編ということで、ヌーソロジーの具体的な内容に入り込んでいき、ヌーソロジーの書籍を積極的に引用しながら説明していこう。

まずは、『冥王星のオコツト』は何故やってきたか？についてである。



これについては早速、書籍『[2013: 人類が神を見る日](#)』の冒頭で、

「[コチラは冥王星のオコツトです](#)」と名乗られながらも、

オコツトから交信が始められた時の内容を引用する。

(味気ない文章なので、味気ある文章に変換もしてみます。)

「オコツトハ、メイオウセイニカンヨスル、シリウスノチョウセイシツデス。コノコウシンハ、スベテ、シリウスカラノソウサニヨッテ、オコナワレテイマス。

シリウスノ地球人ヘノ関与ハ、メイオウセイノ近日点通過時カラ始マリマシタ。太陽系ノ最終構成ノタメニ、地球人ノ意識ニ進化ヲ生ミ出スコトガ、ソノ目的デス。

シカシ、プレアデスガ作ル強カナ付帯質シールドノタメニ、アナタガタノ意識ガ働イテイル位置ニ、ハーベスト・ビーコンヲ焦点化サセラレズニイマス」

Hello world!

オコットとは、冥王星に関与する、シリウスの調整質(???)だよん。

この交信はシリウスからの操作によって行われてるよん。

シリウスによる地球人への関与は冥王星の近日点通過時(約 1989 年)から始まったよん。

太陽系の”最終構成”ってのが起きるので、そのために地球人の意識に進化を生み出すことがその目的だよん。

けど、”プレアデスが作る付帯質シールド(※)”によってそれが防がれてるよん。

(※地球全体を覆う唯物論の意識と解釈できる。)

“ハーベスト・ビーコン”という信号を送ってるけど上手くいかないよん。

とりあえず初めの方のメッセージはそんな感じである。続けて以下。

「ハーベスト・ビーコンは1989年から発信が始まっています。この交信も冥王星を中継ターミナルとしてそのビーコンに乗せて発信させられています。わたしの役目はシリウスの調整シグナルを増幅することにあるのです」

“ハーベスト・ビーコン”は1989年から始まってるよん。

この交信も冥王星を中継ターミナルとしてそのビーコンにのせて発信させられてるよん。

わたしの役目はシリウスの調整シグナルを増幅することにあるよん。

・・・以上。

はたから見ると意味不明なメッセージが来た感じであるが、ちゃんと読むと分からないでもないかもしれない内容である。

以降、ここからはふざけないで原文引用を普通に書きます。

(Kohsen) 「つまり、あなたは冥王星人で、シリウスからのテレパスを僕ら地球人に転送しているというわけですね」

(Ocot) 「冥王星人という表現は的確ではありません。人間型ヒューマノイドは冥王星には存在していないからです。あなたがたにしてみれば、わたしはもっと観念的な存在に映るでしょう。地球人の意識進化を推進するために生み出された“**変換人型ゲシュタルト**”という形容が最も好ましいのではないかと思います」

「変換人型ゲシュタルト……………」

「変換人型ゲシュタルトとは、あなたがた地球人が 21 世紀以降に持つ空間認識のプログラムです。現在の地球人の空間認識は歪曲しています。その歪曲が正しい宇宙的理解からあなたがたを遠ざけてしまっているのです。その歪曲を正常な状態に戻す働きが変換人型ゲシュタルトの役割です。この送信の目的は、わたし自身、つまり変換人型ゲシュタルトをあなたにプログラムすることにあります」

・・・これはあくまで一部だけど、オコットのノリはそんな感じである。

こうして「**半田広宣×冥王星のオコット**」の長い付き合いが始まり、大量の情報が送られてくることになったわけである。

この付き合いが 1989 年から 1995 年にまで及ぶらしい。

そして、『変換人型ゲシュタルト』というワードがまず出てきているので、このシリーズではそれについてを中心に扱っていく。

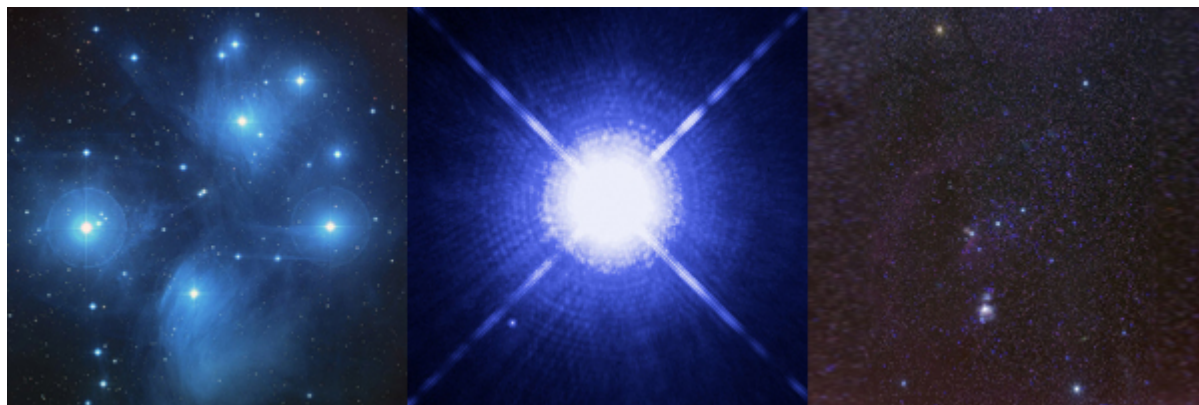
■ 「シリウス革命」より引用する「オコットの目的」

それから、以下は書籍『[2013:シリウス革命](#)』の一番始めに書かれていた交信記録の内容である。

(Kohsen) 「この交信の目的は何なのですか。」

(Ocot) 「はい、オリオンによって開始された、シリウスへの方向採取です。プレアデスで生み出された力をシリウスへ変換するために関与しています。」

ここで、『**プレアデス**』『**シリウス**』『**オリオン**』というワードが出てきたので、それについて簡単に説明しよう。



それらは一般的には星の名前に使われているワードだが、オコットによるそれらは「星の本質」のことを言っているらしく、それぞれ、精神世界にある「特定の領域」とか「特定の場所」みたいな理解で良い。地球と近い意識の領域を『プレアデス』、いくらか離れた領域を『シリウス』と呼んでいる感じである。

『シリウス』は以前からちょくちょく説明してる「上位存在」のある場所みたいな意味だ。とはいったものの、高次元幾何学における「上位」っていうのは、単純に「上」って感じではないので難しいんだけど・・・

その辺をちゃんと学んでくのがこのシリーズの本題であり、そのための『変換人型ゲシュタルト』である。

sonでもって、オコットが言うには「シリウスによる地球人への関与」というものも始まっているらしい。

冥王星の近日点通過時からなので、1989年の9月ぐらいからである。

『プレアデス』は「地球」のある場所であり、ここに近い領域である。

これは「地上」と言い換えることもできそうな意味だ。

ただ、プレアデスの中にも高次元と低次元みたいなものがあり、

低次だと「科学の枠の中の世界」に留まり、高次だと「科学の枠の外の世界」も含んでくる。

つまり、プレアデスも精神世界を含んだ概念になっていて、後半の方になるとシリウスの領域にまで入っているようなものとなっている。

そして、『オリオン』は簡単に説明するとシリウスよりもさらに上位存在である。

だからいわば「上位存在の上位存在」みたいなものだ。

これはほんとに単純な説明だけど・・・

オコットはオリオンについて次の説明をしている。

(書籍『2013:シリウス革命』より引用。)

「オリオンとは観察精神が作り出されている場のこと。あなたがたの概念でいえば神が存在する場所…
…そのようなものでしょうか。」

「神が存在する場所？……その「神」というのは、この宇宙を作った創造主という意味ですか？」

「似ていますが、違います。観察精神とは人間の礎のようなものです。」

なんだか抽象的だが、「大元」とか「礎」とか「果て」みたいなものらしい。

とりあえずはそれ以上の上位存在はないってことで良いらしいので、

「上位存在の上位存在の上位存在」とか「上位存在の上位存在の上位存在の上位存在」みたいなことまではとりあえず考えなくて良い。

考えなくて良いから大丈夫！

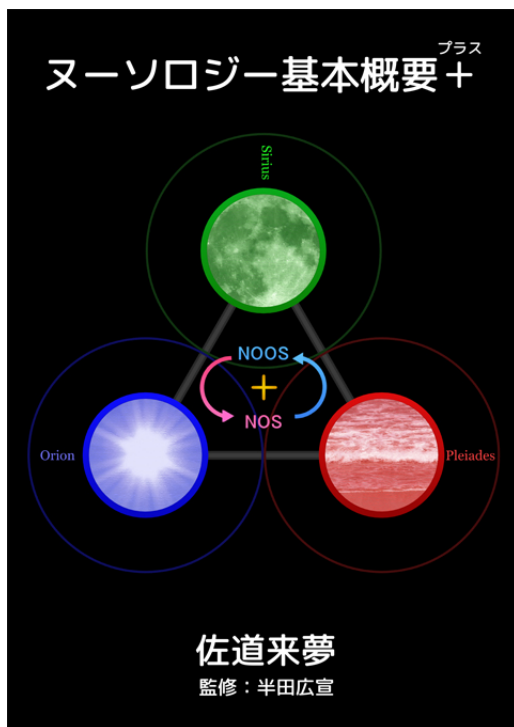
■ 三つの概念の色彩表現

ちなみに、この三つはそれぞれ色彩での表現ができて、

[**プレアデス**：赤，**シリウス**：緑，**オリオン**：青]に対応している。

さらに、オコツトによると[**プレアデス**：地球，**シリウス**：月，**オリオン**：太陽]にもそれぞれ関係があるらしい。

筆者 (Raimu) が書いた書籍『ヌーソロジー基本概要+ (プラス)』の表紙にあるものも、それぞれ以下の意味がある。





オリオン:青:太陽



シリウス:緑:月



プレアデス:赤:地球

以上のイメージと三つの概念を紐づけると、理解しやすくなるかもしれない。

捉え方次第では、『シリウス』に青カラーを当てる解釈もあるが、
とりあえず、今回はこのRGBの3色使用で統一していくことにする。

■ 内容のまとめ

『2013:人類が神を見る日』に書かれていた、
ここまでの「冥王星のオコツトの目的」となる内容をまとめると以下になる。

地球人の意識に進化を生み出すために、シリウスから情報を送る。

ただ、現在の地球人の空間認識は歪曲していて、それが理解できないようになっている。

地球人が21世紀以降に持つ空間認識のプログラムを『変換人型ゲシュタルト』と言う。それは空間認識の歪曲を正常な状態に戻す働きを持つ。それをプログラムする。

（そして、変換人型ゲシュタルトを理解すると正しい宇宙的理解ができて、シリウスやオリオンの情報を理解できることに繋がってくる。）

そしてこの「シリウスからの情報」というのがまた膨大で、
色々と解釈できるのだが・・・とりあえずここまでにする。

詳しくは『2013:人類が神を見る日』を読んで欲しい。ほんとに。

6. 「最終構成」と「変換人」とは？

前回引用したオコツトからのメッセージでは、
『最終構成』ってワードが出てきた。

太陽系ノ最終構成ノタメニ、地球人ノ意識ニ進化ヲ生ミ出スコトガ、ソノ目的デス。

それから、『変換人』ってワードについてもうちちょっと詳しく説明したい。

それらの説明をするために、書籍『2013:人類が神を見る日』を再度引用する。

「変換人というのは一体何なのですか？ もう少し具体的に教えていただけませんか」

「次元変換をしていくために現出してくる新しい力を持った人間たちのことです」

「次元変換？」

「そうです、次元変換です。次元変換とは新たな太陽系を作り出すことを意味します」

「新たな太陽系を作り出す…………？」

「現在のあなたには受け入れ難い内容かもしれませんが、もうすぐ、この太陽系に大きな変動が起こり始めます。シリウスではこの変動のことを最終構成と呼びますが、最終構成に入ると、今までの太陽系は働きを終え、新しい太陽系が作り出されていくのです。この太陽系自体の創成は、実は、あなたがた人間の意識進化と対応しています。しかし、地球人の意識は、その進化の方向性にまだ同調することができていません。地球人に意識進化の方向を与えなければ、新しい太陽系活動にも支障が出てしまうかもしれないのです」

「次元変換」ってワードが出てきたり、ワケのワカン情報になってきた。

この辺は、原書でもコウセンさん自身が戸惑う所である。

その後も話は続いて「最終構成とやらが自然に起きるけど、人間の意識も自然に進化するわけではない」

「意識進化を阻止する背景がある」といった内容になってくる。

ちょっと陰謀論っぽくなってくるけど……

どうもこの辺は、我々があまりにも「唯物論が正しい。」と世界を認識していると、それが意識進化の阻害になるという話らしい。

この辺を突き詰めると、どうしても陰謀論っぽい世界観も絡んでくるんだけど、

ユダヤ人が悪いとかアーリア人が悪いとか爬虫類人が悪いみたいなのは、ニューソロジーでは目指してないのでそっちに行かないように。

あと、『最終構成』について、別のページの情報も参照してみよう。

「人間の意識がプレアデスからオリオン方向に向かい始めるのが太陽系の最終構成の意味なのですか」
「はい、意識が人間の次元から変換人の次元領域へと遷移し始めるということです」
「では、その最終構成とやらは、この地球に何らかの物理的災厄をもたらすのでしょうか」
「残念ながら今の時点では、最終構成が人間の意識にどのような現象を反映させてくるのか、はっきりとお教えすることはできません。現在の太陽系の働きが終わりを告げるという意味では人間の滅亡という表現もできるかもしれませんが、しかし、それは決して物理的な滅亡を意味しているわけではありません」

『プレアデス』と『オリオン』については前回で説明した。
構造的には、[プレアデス⇒シリウス⇒最終的にはオリオン]というイメージである。

「人間の滅亡という表現もできるかもしれませんが」「しかし、それは決して物理的な滅亡を意味しているわけではありません」のくだりも、そういうものということでなんとなく分かって欲しい。

具体的にこれからどうなるかはよく分からないらしい。

■ 次元変換とピラミッド

さて、この「次元変換」というやつ、
さらに突き詰めてみると、古代エジプトで作られた「ピラミッド」もそれを目的に作られたということが分かってくる。



書籍『2013:人類が神を見る日』によると、
「具体的なことはまだ分からない。」
「オコツトが言っていたことを総合してみると」
といったくだりが書かれているけど、

「ピラミッドを作ったのは人間ではなさそう」と書いてあり、
『変換人』のような存在が作ったことは確かのようなのである。

そもそも、この辺りの文明を生きてた古代人は、我々と同じ人間と同様というよりか、俗に言う「宇宙人」みたいなものの方が近いらしい。

まるで宇宙から来たかのように超越的存在だということで、
書籍では「半神半人」という表現もされている。

そうした半神半人のような古代人は、五次元や高次元の知識を持っていて、低次元から高次元への次元振動の共鳴装置を作ることができたらしい。それは高次元への進化を促す強力な宇宙エネルギーを生み出すことができるもので、ピラミッドにもそれが組み込まれているわけである。

ヌーソロジー的には、そうした「意識進化促進装置」として作られたものがピラミッドなのである。

書籍ではコウセンさんは以下のように言っている。

「彼ら変換人達は個人を超えた種族全員に共通のあるビジョンを持っていて、そのビジョンの達成のためにのみ生きていたと言っているかもしれない。そしてピラミッドもそのビジョン達成のための一環として建造されたに違いない」

ヌーソロジーは意識進化について明らかにするものなので、
その辺のロマンや美学の話はどうしても絡んでくる。

さて、「古代人」のネタだと、他にも「アトランティス」や「ムー」の存在も、オコツトに聞けば返答が返ってくる。

それら古代の民は、意識進化して上次元に行ったり行かなかったり、
あるいは、今の時代だと「化石」として存在してたりするらしい。

マヤ文明の遺跡、イギリスのストーンヘッジ、イースター島のモアイ像・・・など、
世界のどこかにある古代の遺跡にも、
そうした不思議な文明の痕跡が残されているわけである。



■ トンデモ情報いろいろなヌーソロジー

このように、『冥王星のオコット』にあらゆることに聞いてみたら、あらゆる返答が帰ってくるので色々なことが分かってくる。

例えば以下とか。

- ・ 夢の世界と死後の世界はまったく同じものである
- ・ 輪廻は存在しない。輪廻しているのは宇宙自身である
- ・ 宇宙のセックスと人間のセックスは互いに反転関係にある
- ・ 人間は死ななくなる、そして、赤ちゃんは生まれなくなる
- ・ 太陽はまもなく核融合を停止する
- ・ やがてコンピューターはすべて停止する
- ・ この宇宙を作ったのはアトランティス人である
- ・ 宇宙には太陽系しか存在しない
- ・ 恐竜が生物として存在したことはない

これらは書籍『2013:シリウス革命』で取り上げられた情報である。

この本は「トンデモ本」の路線で出版された本なので、インパクトのある情報が多い。

あと、筆者（Raimu）が作った『シリウス・ファイル公開所』のページにも、多岐に渡るオコット情報を載せておいた。

〔リンク：「シリウス・ファイル」公開所〕



以上のように、トンデモ情報オカルトモノとしてもウケそうなのが、ニューソロジーの側面の一つである。

・・・さて、トンデモ情報ばかり追いかけてると脱線してしまう。

本題は『変換人型ゲシュタルト』である。

7. 変換人型ゲシュタルトとは？（前編）

まるで古代ピラミッドを建造した「半神半人」のような存在とも言われるのが『変換人』。
神話に残るエジプトの神々もその名残りなのかもしれない？



さらに、数学・コンピューター・ITが飛躍的に進歩した現代では、
変換人の在り方も古代とはまったく違ったものになっているはずである。

そんな変換人のゲシュタルトである『変換人型ゲシュタルト』とは、
ざっくりとどんなものなのか？をここで説明しておこう。

まず、そもそも「ゲシュタルト」とは何か？

それはドイツ語で、形、形態、状態の意味を持ち、
ざっくり言うと「思考様式」のようなものである。

「空間の認識の仕方」とかもそうであり、ヌーソロジー的に「ゲシュタルト」と言うと、空間の認識の仕方がベースになっている意識のカタチと、それに伴う思考様式のことを指す。

人間には人間のゲシュタルトがあり、一般常識的な空間の認識の仕方がある。これはヌーソロジーでは『人間型ゲシュタルト』と呼ばれている。一般的な人間はそれをベースに生きている。

一方で、**変換人のゲシュタルトが『変換人型ゲシュタルト』**なわけである。

まず、変換型ゲシュタルト理解のための第一のキーワードは「反転」であり、
それは一般的な物の見方から反転したものになっている。

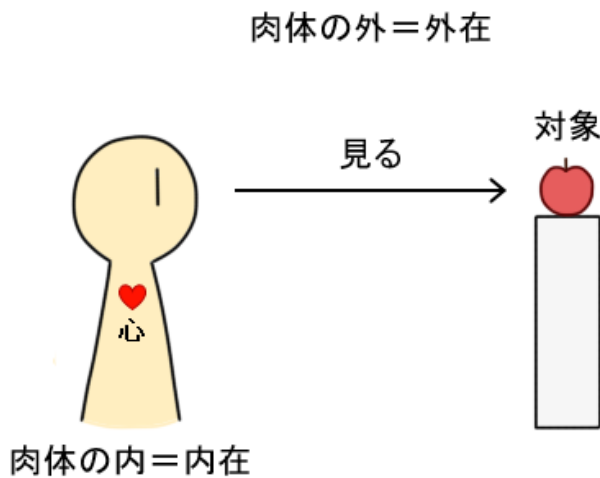
一般的には、人間には肉体があって、その中に「心」らしきものがある。

肉体の外側は「外在世界」となっていて、外在世界に色んな物があって、それを対象として見ることで物を認識する。

肉体の内側は「内在世界」となっていて、我々の意識や心はそこにある。意識は脳に宿ったり、心は心臓に宿っているかのように解釈されたりする。

ここでは外在世界は「外面」のようになっていて、内在世界は「内面」のようになっている。

こうした普通の空間の認識の仕方は『人間型ゲシュタルト』に該当する。



しかしながら、変換型ゲシュタルトでは、まず「内面」と「外面」の関係が逆になっていて、外在世界として見えてる空間が「内面」であり、心のような内在世界が「外面」であるとする。

書籍『2013:人類が神を見る日』で『冥王星のオコツト』は以下のように説明した。

「人間の内面とは、あなたがたが外在と呼んでいる世界、人間の外面とは同じくあなたがたが内在と呼んでいる世界のことを指します」

「内面が外在で、外面が内在？ 内と外が逆だということですか？」

「本当の外宇宙というのは、あなたがたの心の中の方向にある……とでも言っておきましょうか」

『人間の内面』と『人間の外面』もまたオコツト情報特有の用語であり、反転したゲシュタルトにおける内面と外面のことを表す。

一見、外在世界にあるようにみている物質（先の図ではリンゴ）は、自身の内面とは無関係なものではない。自身の持つてゐる心もまた、外面である世界の在り様と無関係ではない。

これがオコツトの言い出した、変換型ゲシュタルトにおける基本的なモノの見方である。

いわば、身体の内側に外在世界（物の世界・宇宙）があり、身体の外側に内在世界（心の世界）があるということ？



うーん・・・そんな感じの感覚が分かるだろうか？

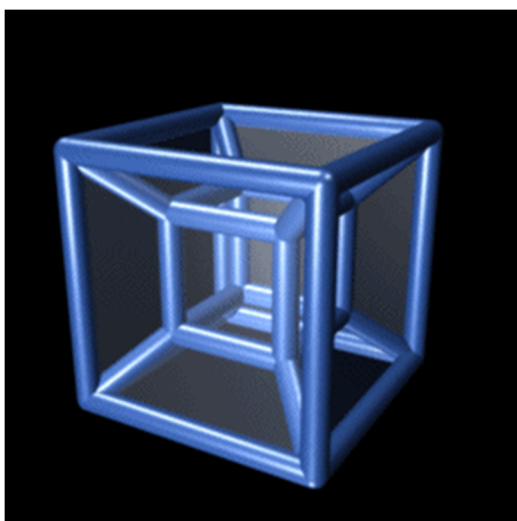
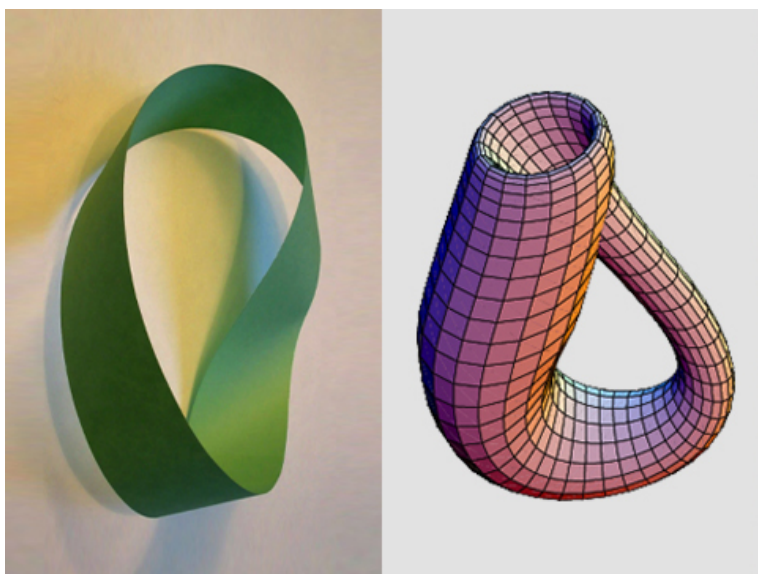
こうした「人間型ゲシュタルト⇒変換型ゲシュタルト」への移行の際には、世界の内と外、物の内と外の間隔を一回「裏返す」ことが必要な構造になっている。

だから、表が裏で裏が表とか、内が外で外が内みたいな、そういうイメージが出てくる。

裏側も表側もないトポロジー、内側も外側もないトポロジーといったら、

「メビウスの輪」や「クラインの壺」といった図形がある。

それから、「4次元立方体」といった図形も、回転させると内と外がひっくり返る構造になっている。



〔アニメーション：内と外が裏返る 4 次元立方体〕

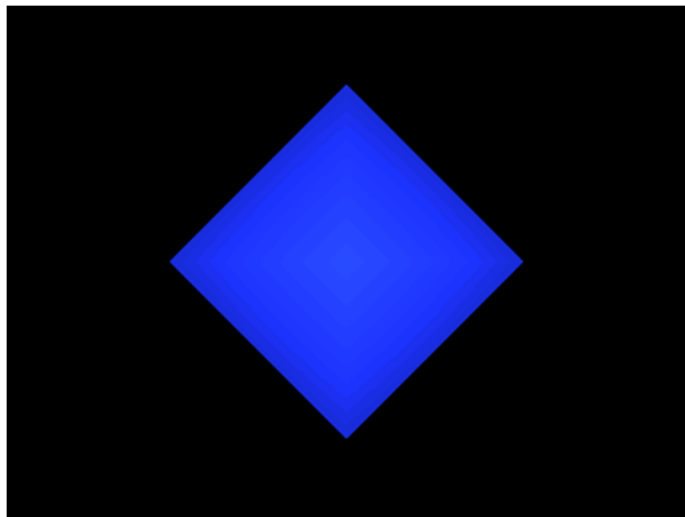
そのため、こうした図形は変換型ゲシュタルトの入門部分と非常に親和性がある。
 いわば、「異界への門」の象徴みたいになっているわけである。

それから、反転したモノの見方が分かると、

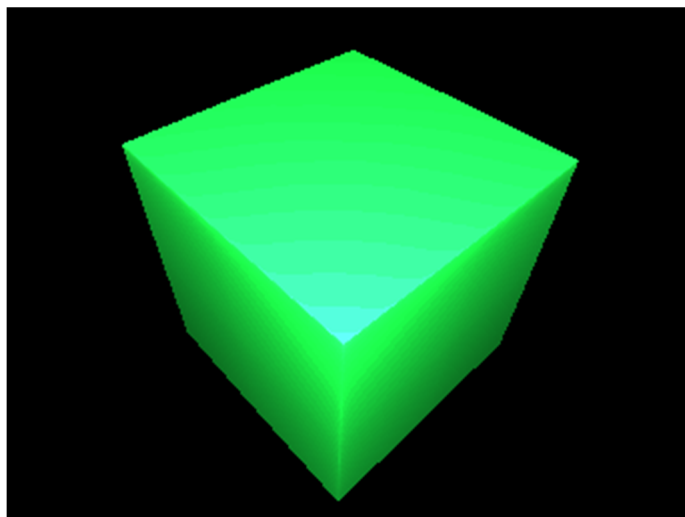
正八面体と**正六面体**にも意味があることが分かってくる。

簡潔に説明すると、それぞれ「外在世界(物の世界)として捉えている内面」と「内在世界(心の世界)として捉えている外面」の象徴となっている。

※外在世界(物の世界)として捉えている内面



※内在世界(心の世界)として捉えている外面



以上のようなことについては、パッと見じゃぜんぜん分からないかもしれないが・・・

ひとまず、こういうことをじっくりと理解していくのがヌーソロジーである。

■ 物質は宇宙精神の影

「反転」した世界が分かると、
自身の持つてゐる心が、外面である世界の在り様と関係してくる・・・みたいなことを先ほど書いた。

これを分かりやすく言うと、**外在世界が内在世界を反映しているように**見えてくる・・・ということになる。

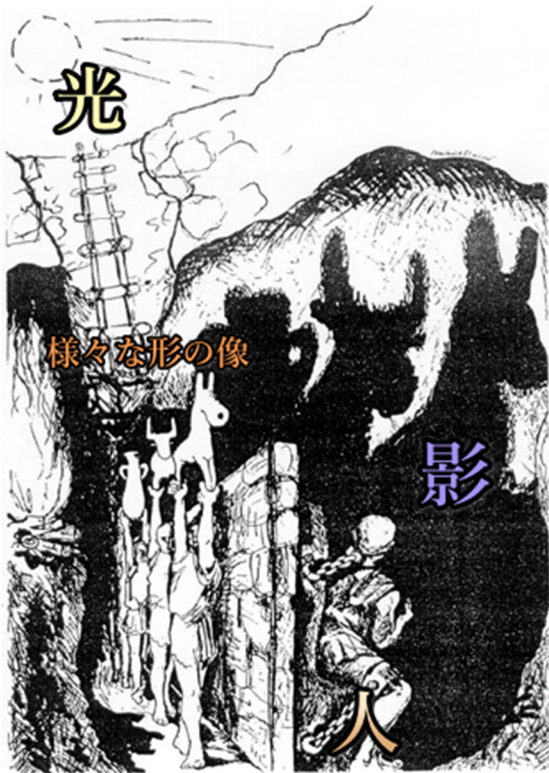
つまり、自身の内在世界（心）によって、自身の見ている風景や状況が変わってくるということだろうか？

この辺は「**引き寄せの法則**」みたいなものにも通じている発想と言える。

それから、オコツトは「あなたがたが物質として見ている存在は、宇宙精神の影のようなもの」と言っていた。

そもそも宇宙には「宇宙精神」と呼べるような壮大な意識があって、その影が、我々が見ている外在世界（物質）になっているということである。

「我々は影しか見えていない」という話は、古代の哲学者プラトンによる『洞窟の比喩』に近い内容である。



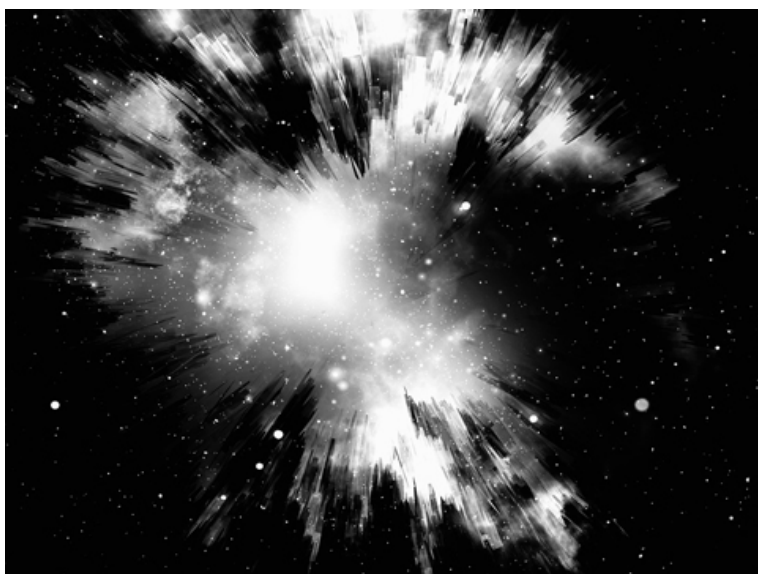
「洞窟の比喩」では、以下のようなシチュエーションを仮定する。

地下の洞窟で生まれた時から縛られた人がいるとして、その中の一方にだけ光があって、様々な形の像（例えば、色んな種類の道具や木や石などで作られた人間や動物）が運ばれていくが、それは縛られた人には見えないようになっている。しかし、縛られた人にはそれらの像の「影」だけが見えている。その場合、その人にとっては「影」が「実体」であるかのように認識する。

プラトンが「洞窟の比喩」で言いたかったのは、それと同様に、われわれが現実に見ているものは、何かものごとの原型となる存在（プラトンがイデアと呼んだ存在）の「影」に過ぎない・・・ということだった。

オコツトが言っていたことは、プラトンがそこで言っていたことにもかなり近いのかもしれない。

このように、オコツトの世界観はそもそもの「外在世界」の捉え方が根本的に違うのである。



一般的な科学における宇宙創造は、まず「ビッグバン」のような現象があって、それはもちろん我々の心とは全く関係のない物理現象であり、そうした物理現象から始まって[宇宙⇒岩石の集合⇒星⇒海と陸⇒自然]といったプロセスで「地球」が出来上がっていき、そこに生き物が登場するようになって、ダーウィンの進化論のように動物が進化していき、高度な知能と心を持った我々が生まれてきて、世界を見るに至ったみたいな考え方である。

しかしながら、ヌーソロジーではビッグバンの話は、「そもそも誰も見たことが無い」ということで否定する方向にある。また、変換人型ゲシュタルトにおいては、むしろ「我々が世界を見る」ことこそが「世界の創造」になる。そうすると、「物質は宇宙精神の影」という発想の方が自然になってくるのである。

以上のように、「我々が見ていることで世界が作られている」みたいな発想は、**「人間原理」**と呼ばれる考え方に近い。人間原理とは、「宇宙があるべき姿をしているのは、人間が観測することによって、初めてそうであると知った時からだ」みたいな、人間ありきで宇宙を捉える考え方である。

ヌーソロジーはその辺に近いことを取っ掛かりとして覚えておこう。

■ 点の内部に入り込む意識

内在世界と外在世界の反転みたいなことが起きると、「点」と「全体」の関係も反転してくる。

変換人型ゲシュタルトの初歩で出てくる「反転」の感覚に近いのは、
「点」の中に入り込む感じであり、
さらに、点の中に世界がある感じである。

我々が普通に「景色」を見ている時は、ざっくりと「全体」が見えてる感じであるが、
そうした中で、いわば「点になる」みたいな感じになってくる。



ここで「**仏教**」をちょっと引用した話をしよう。

仏教には「刹那」という概念があり、それは時間の概念の1つで「きわめて短い時間、瞬間、最も短い時間」を意味する。

もっとも短い時間は、もっとも小さい空間とも接点を持つので、
そうしたミクロな概念を掴むために、仏教にはそうしたワードがあるわけである。

仏教は長い歴史の中で悟り専用の瞑想法が開発されている。

「座禅」が有名だが、中国で生まれた天台宗に伝わる「止観」もまた、
変換人型ゲシュタルトみたいなことを理解することにととても適している。

そうした瞑想法を用いて、一点に集中しつつも、全体を観るような・・・そんな感覚を開発していく。

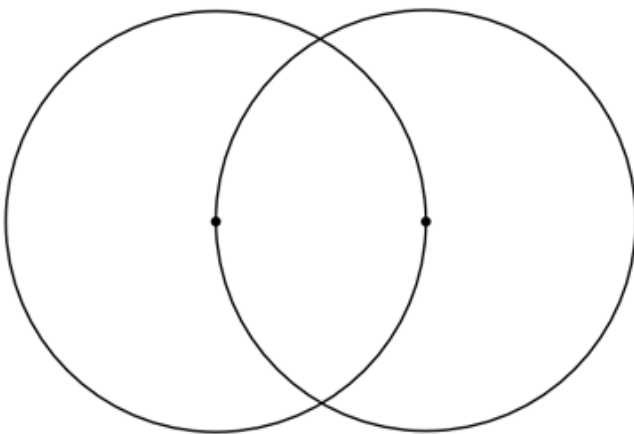


点の中から世界を観れるようになると、
今度は世界全体で「点」が無数に広がっていて、全体から「視線」が出てくるような感覚にもなる。

そうした空間認識の仕方が、変換人型ゲシュタルトの基本であり、ニューソロジーの基本にもなってくる。

■ 二つの円と回転の関係

さて、「点になる」みたいなことを書いていったが、
自身が点になった場合、「自己」と「他者」が以下のような関係になってることがさらに見えてくる。
二つの点と、それを中心とする二つの円が交わっている図だが、
この図から何が分かってくるのだろうか？



左側の点を点 A、右側の点を点 B としよう。
そして、点 A が片方の点 B を中心に回っていたとしよう。
その場合、点 B を中心に点 A が回っているのは客観的に見たら事実だとしても、
実は点 A にとっては点 B が自身を中心に回ってるようにも見える。

したがって、片方を中心にもう片方が回っていると、実は二つの円運動が存在してることになる・・・??
ということがヌーソロジーで言われている。

これもまた、ヌーソロジーを理解するにおいてとても重要な原理になってくる。
点 A は「地球」、点 B は「太陽」の関係だと理解すると分かりやすい。

こうしたことをじっくり考えていくのもヌーソロジーの特徴である。

以上。長くなってしまったので、
『変換人型ゲシュタルトとは？（後編）』に続く。

8. 変換人型ゲシュタルトとは？（後編）

引き続き「変換人型ゲシュタルトとはどんなものか？」についての話をする。

■ 主観と客観の関係性

ヌーソロジーを理解していこうとすると、

「主観」と「客観」の関係についてがまず出てくる。

これもヌーソロジーの基本であり、変換人型ゲシュタルトの基本でもある。

一般的には、客観は外在世界から生じるもので、

主観は内在世界から生じるものである、と理解するのが正しい。

しかし、ヌーソロジーの場合は、やはり「反転」が絡んでくるので、

内在世界から客観が生じてるかもしれないし、

外在世界から主観が生じているかもしれない？

ということになる。

主観と客観の関係の理解のため、

ブログで以下のツールを用意したことがある。

[『視点変換3Dルーム』](#)という、Web上で動く3Dコンテンツである。

[リンク：「視点変換3Dルーム」というのをUnityで作りました | 哲学思考のなれの果て]

この3Dコンテンツでは、自己視点と他者視点との切り替えが可能であり、

視点を切り替えると実際にどういう光景になるかを疑似体験することができる。

また、その切り替えは主観と客観の切り替えを意味するものでもある。

主観は自己視点によって作られ、客観は他者視点によって作られているものだからである。

そして、4番目の部屋では「KitCat」と書かれた缶が、

自身の周りで周っている様子と、

自身から見えてる光景とを切り替えることができる。

他者視点（客観）



〔アニメーション：自身が自転していて、缶がそれを中心に公転している〕

自己視点（主観）



〔アニメーション：自身が見ている缶の公転だが、缶が自転しているようにも見える〕

〔Youtube 動画：視点変換 3D ルームでの KitCat 缶回転（KitCat 実験）〕

他者視点から見たら、当然ながら缶は必ず自身の周りを回ってるように見える。

しかしながら、自己視点から見たら、自身が缶の周りを周っているように見ることもできるのである。

この「自身が缶の周りを周っているように見る」という思考の切り替えをやってみよう。

この感覚も重要な「反転」であり、
ヌーソロジー理解のための基本となる。

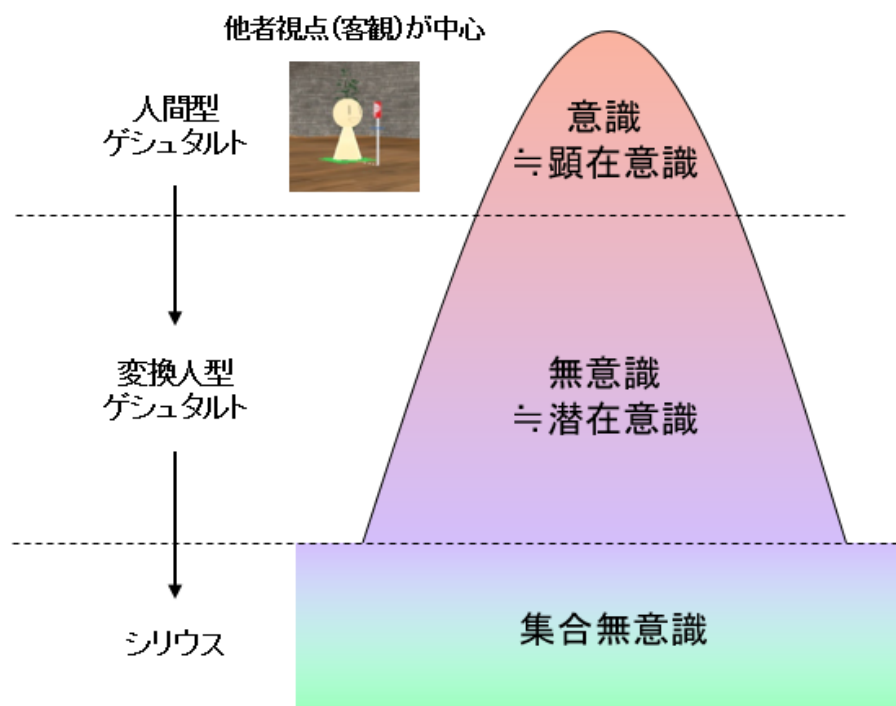
■ 自我を解体する道

ここまで、人間の空間認識の仕方と、
その反転についてをロジカルに説明してきた。

こうした構造は、必然的に「心」の問題とも絡んでくる。

ヌーソロジーを理解すると、我々の普段の意識を形作っている「自我」も空間認識と関係あることが分かってくる。

そして、我々の心の在り様も、そうした自我の在り様によって決まっているため、**空間認識の変容の問題は、必然的に心の変容の問題にも繋がってくるのである。**



人間の自我は、上記の図だと「意識≡顕在意識」の中にあるものであり、これは人間型ゲシュタルトがベースになっている。

人間型ゲシュタルトとは、「外在世界を外面」とする通常の認識であり、科学に則った思考の仕方や、物理法則に則った物の見方である。

そして、こうした認識は「他者視点（客観）」が中心になってできている。

人間型ゲシュタルトから変換人型ゲシュタルトに移行するということは、こうした世界から脱することなので、必然的に**無意識の世界に行くことと同義**となる。

したがって、ヌーソロジーを真剣にやると、顕在意識の中心にある自我を解体したり、捉え直したりすることになる。

そして、そうした無意識の世界に向かうと、自然と出てくる感情がある。

自身が今まで無意識に抑圧してきて、向き合うことを避けた負の感情がそこにあるかもしれない。認容し

がたいと思っている心的内容は、その人の暗い部分をなしている。

人間の心には必ずそうしたものが生じるパターンがあり、ユングはそれを「シャドウ」と呼んだ。
無意識の世界に行くとそんなものが出てくるかもしれない。



むしろそうしたものを無いものとして、スピリチュアルや精神世界の道に進むのは危険である。
それが出てこないスピリチュアルは絶対に嘘だろう。

そうしたリスクがある中で、
心や感情がついていける人間はどれだけいるのだろうか？

以前にも書いたことだが、人間はつい他者依存したがる生き物であり、
特に不安や恐れを抱えた心を持っているほどそうになってしまう。
他者依存をしたがる性質は、人間型ゲシュタルトの世界への依存や、自我依存をしたがる性質と同義となる。
不安があって他者依存をしていると、無意識の世界へは進めないし、
ヌーソロジー的な「前」へは進めない。
したがって、自己を安定させるために、そうした分野専門の心理学が必要になることもあるかもしれない。

こうした心の問題が絡みながらも、
ヌーソロジーは極めてロジカルに無意識の世界を突き進んでいく。

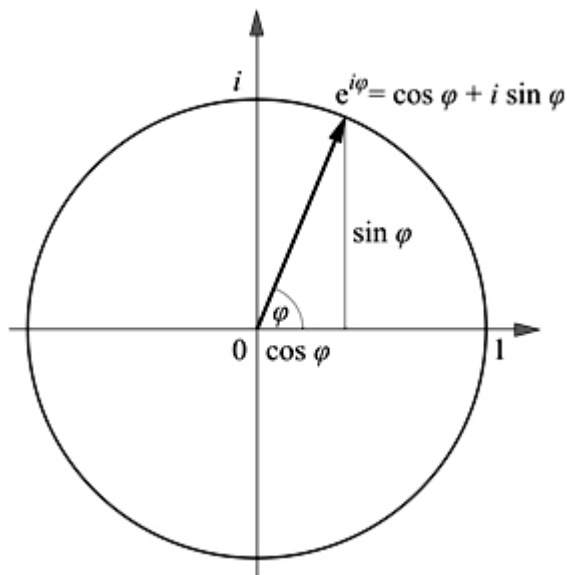
■ 素粒子と原子の秘密

あと、変換人型ゲシュタルトの話で大事なのは、
「素粒子の構造が人間の意識と関係している」と言われていることである。

以下、書籍『2013:人類が神を見る日』に書かれていたオコツトの言説である。

「主体と客体の関係性に形作られている幾何学が展開されていく空間は、おそらくあなたがたが**複素空間**と呼んでいるものと数学的には同型対応していくことになるでしょう。量子的な空間とあなたがたの意識を構成している空間は、わたしたちにとっては全く同一のものとして見えています。あなたがたが量子世界の中に見ている構造は、意識を構成するための高次元空間の射影のようなものと考えて下さい」

「**複素空間**」は「実数＋虚数」で構成されるもので、「オイラーの公式」にも表れているものであり、量子力学の基本である「波動関数」に出てくるものである。



オコツトによると、これが主体と客体にも関係してくるとのことだった。主体と客体は、主観と客観にも絡んでいる。

また、「量子世界の中に見ている構造は、意識を構成するための高次元空間の射影のようなもの」と捉えることがニューソロジーの中核にあり、

『2013:人類が神を見る日』にはそうしたことがちょくちょく書かれている。

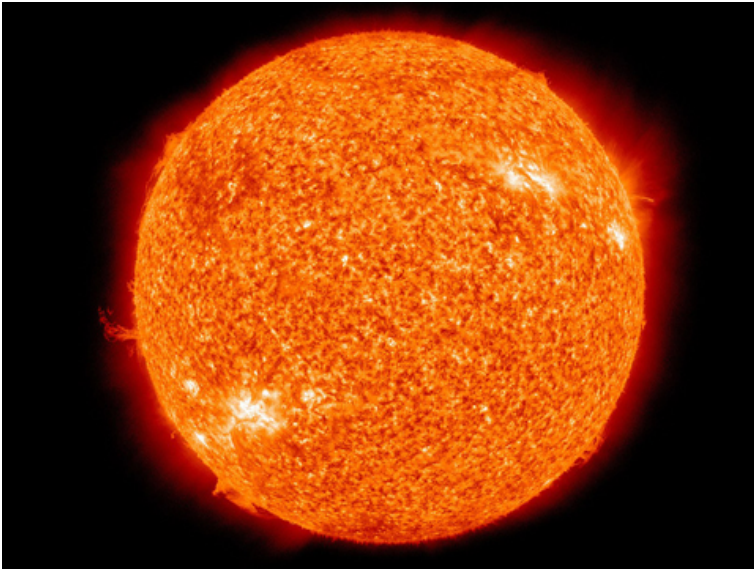


ニューソロジーの初期にあったキャッチコピー「素粒子の正体は、我々の意識だった！」の由来はここにあり、ニューソロジーが素粒子の構造にこだわる理由もここにある。

こうした複素空間や波動関数の話から、本格的な量子力学の話に繋がってくるだけでなく、他にも、u クォーク、d クォークに関係する物理学や、光子、電子との関係まで絡んでくるし、電場と磁場も絡んでくる。全部で 17 種あるとされる素粒子すべてや、反粒子にも何かしらの意味がある。

さらに、陽子と中性子は u クォークと d クォークで構成され、陽子と中性子が合わさって原子核になり、原子は「原子核＋電子」で構成される。素粒子が意識の構造を表すということは、原子もまた意識の構造の集合体であり、何かしらの精神が宿るということになる・・・？

加えて、原子の基本は水素とヘリウムである。水素は原子番号 1 番で中性子を含まず、一個の陽子と一個の電子で構成されている。ヘリウムは原子番号 2 番で、二個の陽子と二個の中性子と二個の電子で構成されている。そして、太陽で起きている核融合反応は水素とヘリウムの間で起きている。ここでも何かしらの意識が動いていて、人間にとって何か重要な意味があるらしい？



書籍『2013:人類が神を見る日』にはそんなことが書かれていた。

そして、人間型ゲシュタルトでは絶対にこうしたことが理解できないため、これらを理解するためには変換人型ゲシュタルトが必要であると、

『冥王星のオコツト』という外来者が言っていたわけである。

そんなオコツトが言ったことから構築されていったのがヌーソロジーである。

・・・以上。

とりあえず「変換人型ゲシュタルトとは？」の説明はここまでとする。

内容を一気に詰め込んで書いていったが、これらはあくまでざっくりした説明である。

まだ分からないかもしれないが、こうしたことの理解をこれから深めていくわけである。

変換人型ゲシュタルトについてしっかりと知るためには基礎用語がいくつか必要になるため、次回からはそれについて一つずつ説明していく。

9. 基礎用語① 次元観察子と定質/性質など

これから変換人型ゲシュタルトを具体的に学習するための「基礎用語編」を始めていく。
言うなれば「ヌーソロジー用語」についてである。

ヌーソロジー用語とは、主に『冥王星のオコット』が提供してきた新規用語（もとい謎のワード）であり、その一つ一つがなるべく正確に分からないとヌーソロジーは理解できない。
これまで出てきた『オリオン』『シリウス』『プレアデス』『変換人』『最終構成』『人間の内面』『人間の外面』といったワードもヌーソロジー用語の一種である。

ヌーソロジーにはそうした未知のワードがたくさんあるのでそこが大変な所だが、
とりあえず理解すべき用語はそう多くはないため、
変換人型ゲシュタルトの理解に必要なものに絞って説明していく。

■ 13 の次元ユニット。「次元観察子」について

まずは『次元観察子』という用語についてである。

これについては、書籍『2013: 人類が神を見る日』にある以下のエピソードではじめに伝えられたらしい。

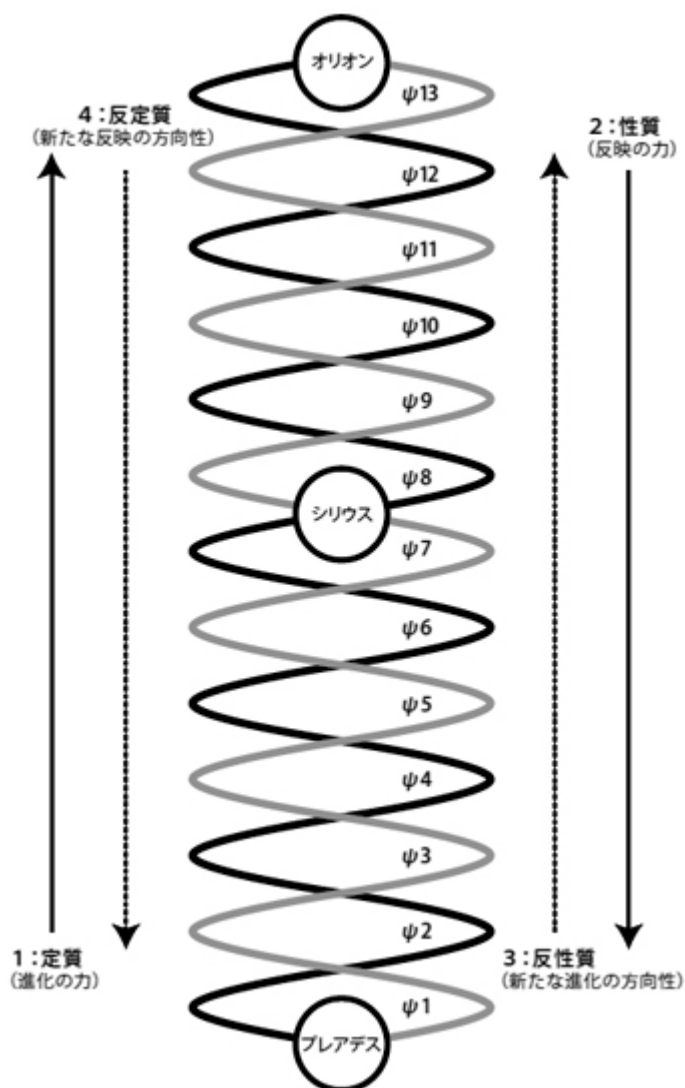
オコットからの二度目の交信は、何の前触れもなく突然始まった。

「**タカヒマラをユークリッド平面に変換してビジョン転送を行います。意識を右後頭部に集中して下さい**」

タカヒマラ……………？……………オコットの声が聞こえて間もなく、右腕の感覚が麻痺し始め、人さし指の先の方から何やら螺旋状のエネルギーのようなものが流入してきた。右腕の全神経網にピリピリと電気的なパルスが走りだし、手が勝手に前方に動いていく。その小刻みな痙攣はあっという間に右肩にまで達し、工業用のロボットアームのように不器用な動作で目の前のペンを握らせた。

——こ、これは……………自動書記だ。——

テーブルの上に置いたメモ用紙に波のような模様と、 ψ 1、 ψ 2 ……というように、何かの記号のようなものが記されていく。しばらくして腕の動きが止まったとき、そこには、DNAのような二重螺旋の図と4本の大きな矢印とが描かれていた。そして、ちょうど、 ψ 13、 ψ 7、 ψ 1と記された部分に、オリオン、シリウス、プレアデスと、カナ文字で書いてある。



『タカヒマラ』とは、ニューソロジー的な「宇宙のシステム全体」「森羅万象」みたいな意味で合ってそうなものである。

ちょっと中略を挟んで、引き続き以下の説明へと入る。

「先ほど送信した図をもう一度よくご覧になって下さい。オリオンとプレアデスの間にいくつの定在波が作り出されていますか？」

わたしは自動書記によって描かれた図を手にとった。2つの螺旋が作り出す間の領域の一つ一つに、しっかりとψ1からψ13までの記号が示してある

「……………全部で13です……………」

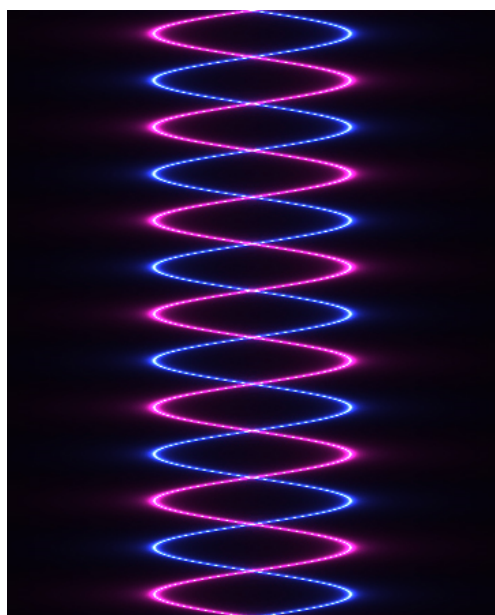
「よろしいでしょう。そこに記されているψ1からψ13のことをわたしたちは次元観察子と呼んでいます。次元観察子とはタカヒマラを構成している次元ユニットのようなものとお考え下さい」

『次元観察子』！

これこそがニューソロジー学習の中心となる概念であり、変換人型ゲシュタルトで終始出てくるワードである。

オコツトによると「次元ユニットのようなものとお考え下さい」とのことである。

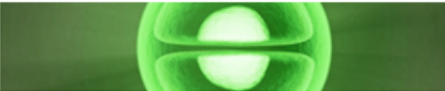
ここでは 13 ある定常波のような形で説明された。



「次元ユニットとは？」という気もするけど、
とりあえずこの 13 のユニットは森羅万象を網羅しているため、
これが分かると森羅万象のありとあらゆることが構造的に分かってくる。
後々詳しく説明するので、とりあえずの理解はそんな感じで。

あと、次元観察子はタカヒマラの階層構造を形作っているものでもある。
タカヒマラというのは宇宙全体のシステム的なものであり、精神世界的なものでもあるので・・・
つまり、次元観察子によって**精神世界にある階層構造**が明確に分かってくるわけである。

次元観察子の奇数番目と偶数番目は一つのペアになっていて、それらが一つの階層になっている。
 $\psi 1 \sim \psi 2$ が第一層、 $\psi 3 \sim \psi 4$ が第二層、 $\psi 5 \sim \psi 6$ が第三層・・・みたいに続いていて、
 $\psi 13$ が第七層でそこで一旦打ち止めとなる。

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層
	$\psi 13$	第七層

宇宙全体のシステムは七階層になっているということで、
「7」という数字もキーワードになってると言える。

そしてこうした中で、人間は $\psi 1 \sim \psi 2$ の位置にいるらしい。

そこから一層だけ進むと $\psi 3 \sim \psi 4$ になる。したがって、変換型ゲシュタルトの初歩で出てくるワードもそれになるわけだ。

全部で13まで行かなければならないので、頑張ろう。

(※必ずそこまでやるという話ではないので、後で詳しく説明します。)

■ 定質と性質

次に『定質』と『性質』について説明する。

先ほどの続きを引用する。

「つまり、宇宙の全体性は13の次元で構成されているということですか」

「はい、基本的にはそうです。しかし、このタカヒマラには2つの力の流れが存在していますから、全体で26の次元が存在しているという言い方ができるかもしれません」

「2つの流れ？」

「はい。一つが……プレアデスからオリオン、つまり、 $\psi 1$ から $\psi 13$ へと向かう力の流れのことで、もう一つがその反対方向 $\psi 13$ から $\psi 1$ へと向かう力の流れです。この相対的な二つの力の流れのことをわたしたちはそれぞれ**定質**と**性質**と呼んでいます。あなたがたの神話で言えば、定質とはイザナギノミコト、性質とはイザナミノミコトのことと考えて下さい」

「イザナギとイザナミ……………」

「はい、イザナギとはタカヒマラに生み出された13の次元を持つ定在波を相殺していく働きを持つもので、イザナミは新たな定在波を作り出していく働きを持っているということです」

「なるほど……………、13の風でイザナギ……………の波でイザナミ……………というわけですね」

「全く、その通りです」

先の図に書いてあったように、次元観察子には二つの力の流れがあり、
[プレアデス⇒オリオン]のものが『定質』、[オリオン⇒プレアデス]のものが『性質』と言われている。

そして、なんと。日本神話に出てくるイザナギとイザナミが出てきた。
それも関係してるらしい。



イザナギは国の創成期に活躍した男性神であり、
イザナミは死んで黄泉の国へ行った女性神である。
アマテラスやスサノオの親にあたる、超有名級の神様だ。

ヌーソロジーの情報はこういう日本神話ネタとも親和性がある。

■ 反性質と反定質

続いて、『反性質』と『反定質』について説明する。

また書籍を引用しよう。

「さて、タカヒマラが律動していくためには、定質と性質だけでは不十分で、もう一組の二元性が必要とされます。この二元性はタカヒマラの中に起きている反響のようなもので、それぞれ**反定質と反性質**と呼ばれます」

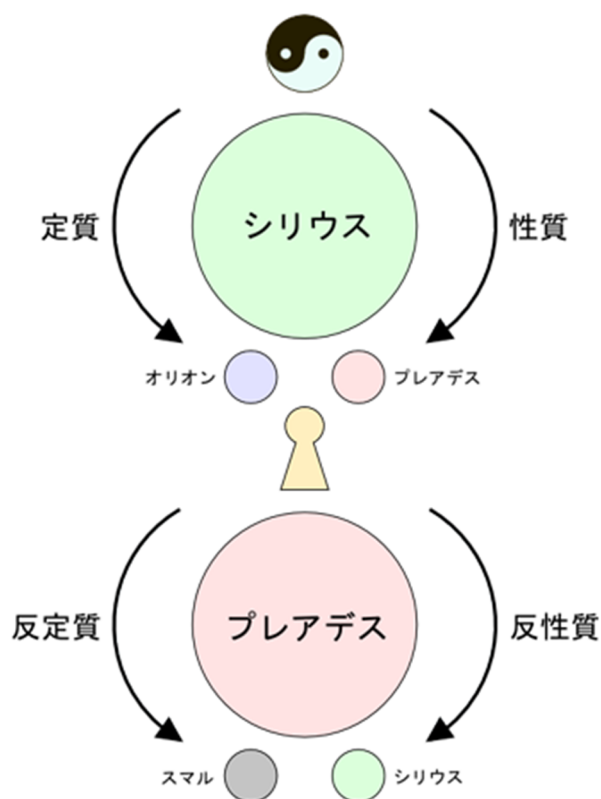
「反定質と反性質？ ………それらは定質と性質の反対側に生まれている力のようなものですか」

「そうですね、反定質と反性質とは、人間が現在、意識と呼んでいるものに相当しています。」

長くなるので続きは省略する。

『反定質』と『反性質』ってワードが出てきた。これは人間の意識に相当するらしい。
このうち、**進化の方向性と言われるのが『反性質』**、**その反映（逆向き）と言われるのが『反定質』**である。
ちょっとややこしいが、力の方向性が同様なのはそれぞれ[定質・反性質]と[性質・反定質]の組同士である。

[定質・性質・反性質・反定質]の四概念については、
書籍『2013:シリウス革命』でも説明されている。
そこでは、シリウスにあるのが「**定質と性質**」で、
プレアデスにあるのが「**反定質と反性質**」と書かれている。
sonでもって、プレアデスより下次元に『スマル』ってのがあって、そっち方向に行くのが反定質で、シリウス方向に行くのが反性質となる。



要するに、[ベータデス⇒オリオン]の方向の流れが定質、[オリオン⇒ベータデス]の方向の流れが性質。
 [スマル⇒シリウス]の方向の流れが反性質、[シリウス⇒スマル]の方向の流れが反定質。
 上次元方向に行く流れが「定質と反性質」、下次元方向に行く流れが「性質と反定質」。
 整理すると以上になる。

シリウスの世界と人間の世界とで、
 「定質⇒反定質」「性質⇒反性質」
 となると、方向性が逆になるねじれ現象が起きる所も重要そうである。

上位存在にとっての進化の方向性は、人間にとっては逆になるらしい。

■ 神と人間を繋ぐ道

さらに、ベータデスとオリオンの関係で以下のことが言われている。

「しかし、このタカヒマラの構造がわたしたち人間とどのように関係しているというのですか」
 「タカヒマラにおいては、人間とは性質が生み出されている状態を意味します」
 「性質？……つまり、人間はオリオンからベータデスに向かう力によって作り出されているということですか？」
 「はい。オリオンとベータデスとは、いわば、神と人間の関係に相当します。宇宙の最も根本的な二元性とは神と人間のことを言うのです」

なんだか難しくなってきた。

ヌーソロジーはやはり「神とは何か？」を明らかにする神学としての特徴が強いと思う。

プレアデスとオリオンの間には、[プレアデス⇒シリウス⇒オリオン]のルートがある。

そして、13の次元観察子はプレアデスとオリオンを繋ぐ道になっている。

言い換えると、次元観察子は**神と人間を繋ぐ道**になっているわけだ。

また、それは[プレアデス⇒オリオン]の力（定質）と、[オリオン⇒プレアデス]の力（性質）を対で生み出しているわけである。

次元観察子についてざっくりしたことは分かっただろうか？

そして、**次元観察子を具体的に理解していくものが『変換人型ゲシュタルト』**なのである。

それから、今のヌーソロジーだと、次元観察子は全部で14あることになっている。

・・・えーっと、これについては次回に詳しく説明する。

10. 基礎用語② 負荷・反映・等化・中和

引き続き、ニューソロジー用語についてである。

ニューソロジー学習の基礎となる、

オコットが言ったとても重要な4つのワードがある。

それは『負荷』『反映』『等化』『中和』の4つだ。

この4つはそれぞれ数字の「1」「2」「3」「4」に対応している原理でもある。

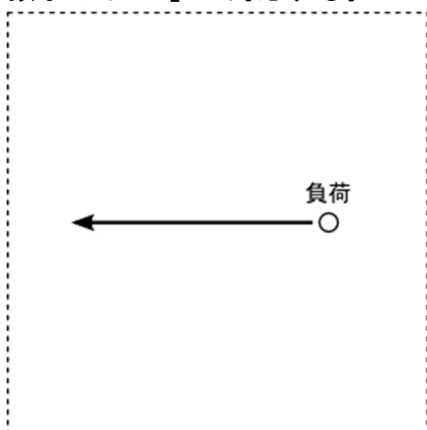
まずはそれぞれについて軽く説明しよう。

• 負荷

とある始原となる存在があったとして、

そこから開始する作用にあたる。

数字では「1」に対応する。

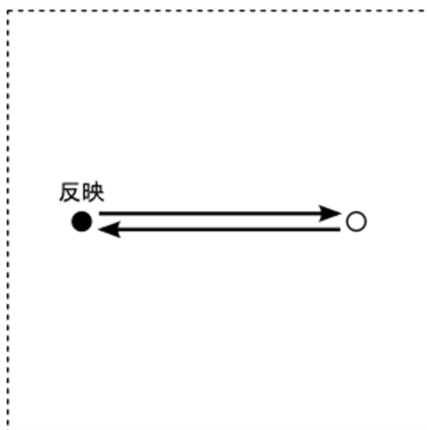


• 反映

『負荷』という開始の力に対して生まれる、

それとは逆向きの作用にあたる。

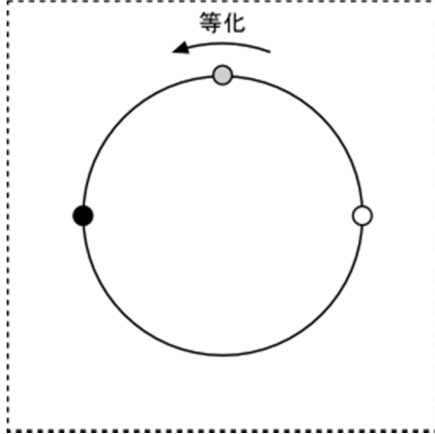
数字では「2」に対応する。



- 等化

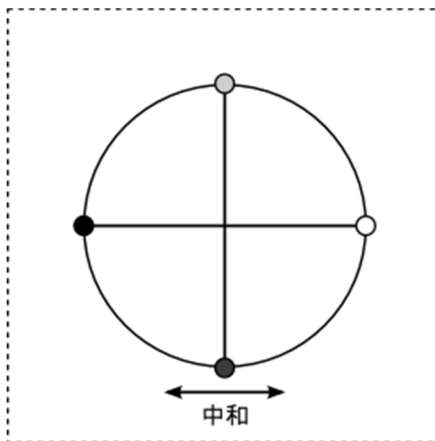
『負荷』と『反映』という、
背反するものを統合するような「回転」の作用、
または、対象性を見出す作用にあたる。
数字では「3」に対応する。

『負荷』と『反映』を新たな次元の視点で見る力を持つ。



- 中和

『等化』の回転に対する逆回転。
回転が相殺されるため、その意味で、『中和』は「分離」するような作用にあたる。
また、双方の対象性を見出すのを拒む作用にもあたる。
数字では「4」に対応する。
新しい物質を誕生させるような力を持っている。



それから、「負荷と反映」や「等化と中和」の二つは対立関係にあり、
そのことを『対化』と呼ぶ。
例えば、負荷と反映の対化は、等化に向かうこともあるし、中和に向かうこともある関係である。

■ 4つの原理と自他関係

上記の『負荷』『反映』『等化』『中和』の4つをもうちょっとイメージしやすいように説明しよう。

この4つの原理は数がある所にはどこにでも出てくるような概念である。

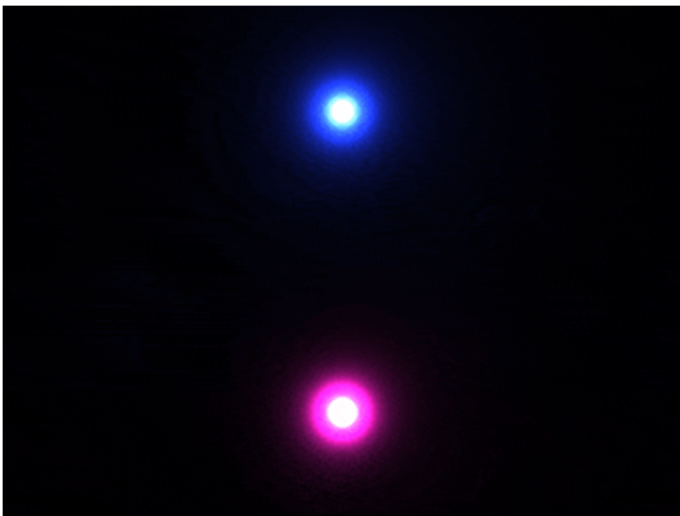
「自己×他者」関係でも出てくるし、次元幾何学でも出てくるので、それらをベースに説明してみよう。

- 負荷：始まる。ただ自分がいる



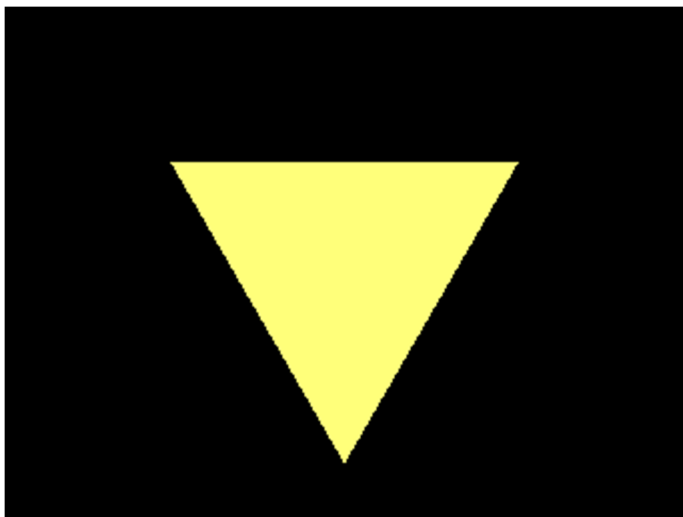
「ただ単に始まる」「一方向のもの」みたいな意味で良い。
次元的には点だけなので、零次元の状態である。

- 反映：受け手がいる。相手がいる



〔アニメーション：二つの光が円を描くように回転〕
相手が出てくることによって多様な事象が起きる礎となる。
次元的には二点が停止してると一次元の線が出来て、
円運動すると二次元の場が生じる。

- 等化：俯瞰（ふかん）する者がいる。次元上昇



〔アニメーション：正三角形の板が縦回転〕

「次元上昇」を意味する特別な概念。

「負荷と反映を対称的に見る」と説明がされている。

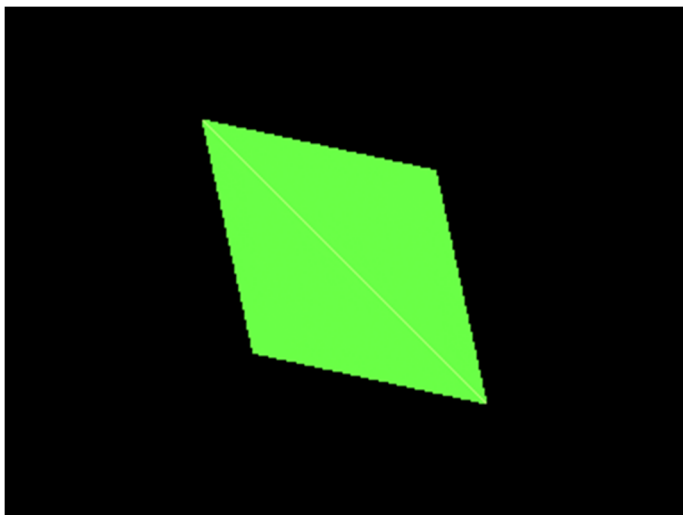
負荷と反映がコインの表と裏だった場合、

次元を上げると表と裏の対称性が見えるような意味でもある。

次元的には三点が停止してると二次元の面が出来て、

z 軸方向への回転が起きると三次元の場合が生じる。

- 中和：第三者の相手。安定する



〔アニメーション：正四面体が回転〕

「等化」に対する「反映」と同義。

3 番目までだと不安定なため、新しい次元が安定する。

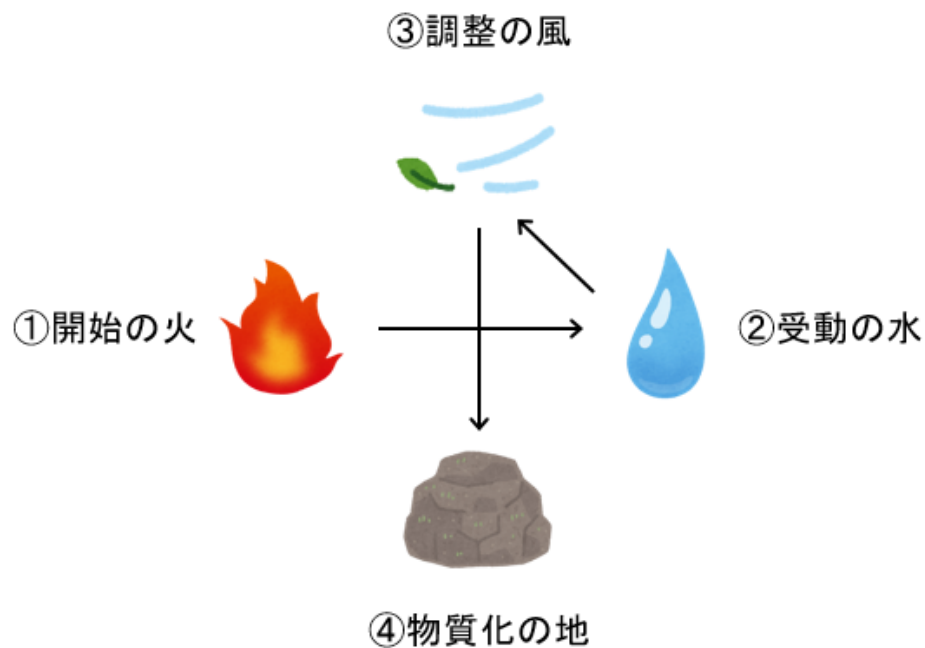
次元的には4つの点があると最低限の三次元立体（＝正四面体）ができる。

上記の4つは、疑似的なものだと次のようなイメージになってくる。

- ・ 負荷（始まる）
- ・ 反映（受ける）
- ・ 等化（俯瞰して捉える/調整する）
- ・ 中和（安定する/物ができる）

これらは万物にある究極元素みたいなものなので、

四大元素のイメージ（火・水・風・地）とちょっと絡めてみるのも良いかもしれない。

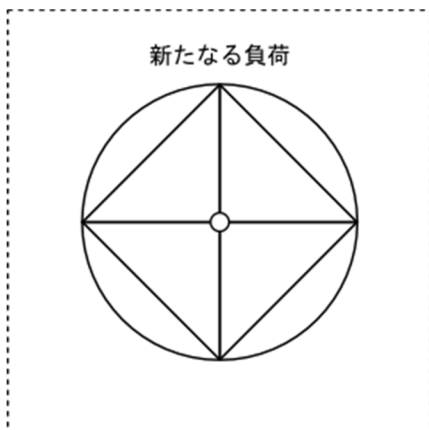


■ ペンタースystemと次元観察子

そして、『負荷』『反映』『等化』『中和』の原理に加えて、

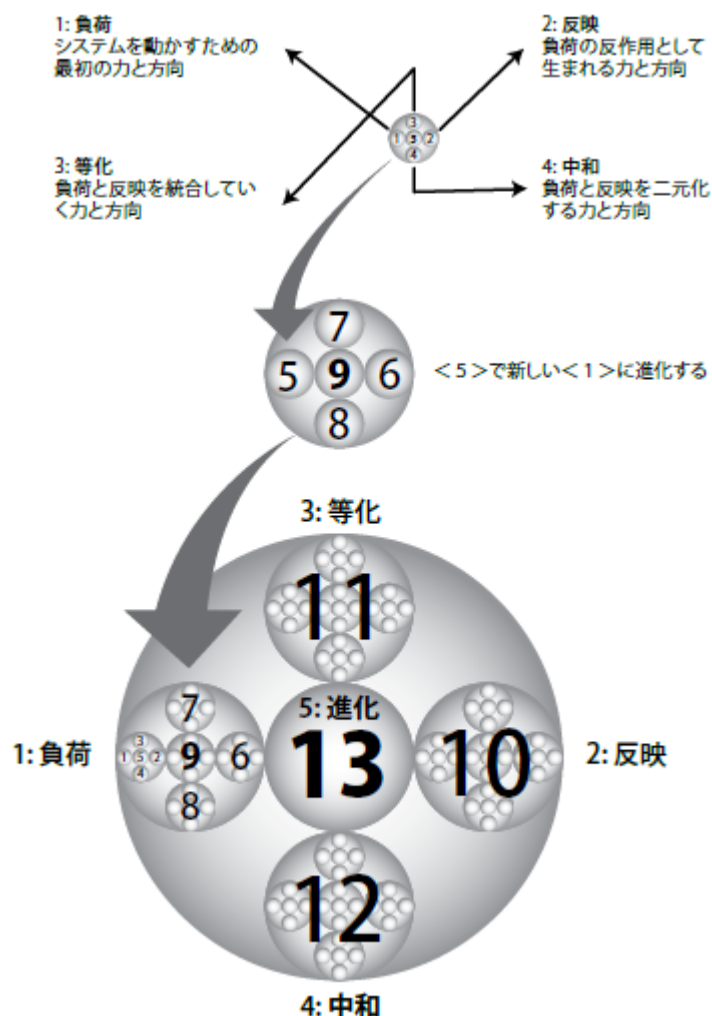
4番目の次の5番目は、次の1番目（新たなる負荷）になるという原理がある。

- ・ 新たなる負荷



4 番目より次に進むと、それがさらに新しい『負荷』になり、
 [5⇒1（負荷）, 6⇒2（反映）, 7⇒3（等化）, 8⇒4（中和）]と進んでいくようになる

このように、5 区切りで次に発展するシステムを『ペンターブシステム』と言う。



書籍『2013:人類が神を見る日』より引用

それから、なんでこのペンターブシステムの話が大事かというと、
 前回説明した『次元観察子』がその構造を持っているからである。

[1, 2, 3, 4]⇒[5, 6, 7, 8]⇒[9, 10, 11, 12]⇒[13]の発展構造は、

そのまま、次元観察子 ψ 1～ ψ 13にも当てはまる。

あと、13 番目の反映となる 14 番目がある。

これは前回の「なんで次元観察子は ψ 14 までとされてるのか？」に対する解答である。

書籍『2013:シリウス革命』の出版は 1999 年で、その時まではまだだったが、

2000 年代に入ってからニューソロジーで、次元観察子は全部で ψ 14 までとするのが主流となっていた。

恐らく、14 番目はオコットがよく分かってない次元であり、
代わりに、人間ならよく分かる次元である。
人間視点でヌーソロジーが分かってくるほど、14 番目が大事になってくる。

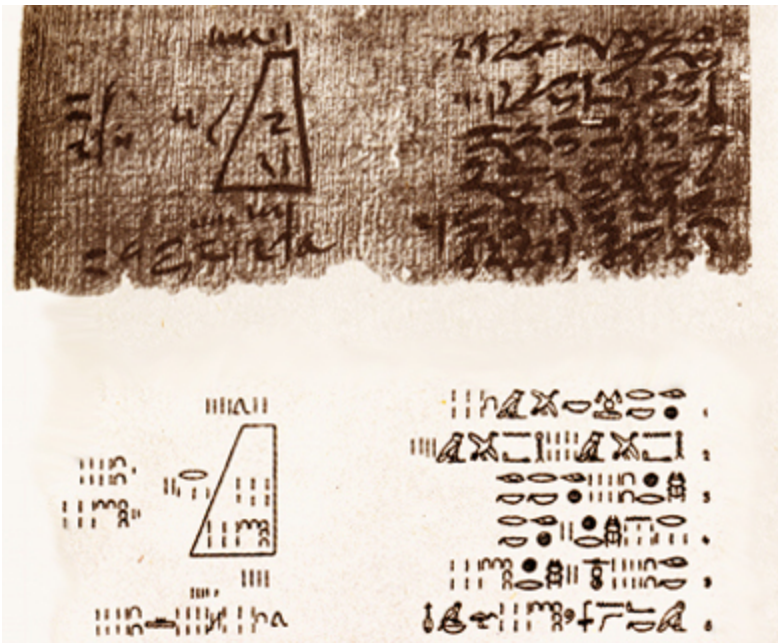
■ 「数は霊である」の文化

数字の「5」を区切りとするペンターステムについて、
書籍『2013: シリウス革命』では以下のことが書かれている。

彼らは、まず「5」という数を無限の象徴として扱う。妙な言い方になるかもしれないが、彼らは「1」よりも「5」が先行して存在していると考えなのだ。そして、この、数以前とも言える至高の「5」によって、「1」の観念を作り、これを存在が出現するための負荷と定義している。次に、そうやって生まれてきた「1」から、続く「2」「3」「4」「5」までの数に例のタカヒマラにおける基本概念 定質、性質、反性質、反定質などの意味合いをそのままダイレクトに当てはめ、宇宙のベーシックな構造を組み立てている。つまり、彼らにとって数とは言語そのものなのである。

数を「言語」とか「象徴」とか、
時には「霊」のように生命を持ったものとして扱う文化は古代にもあった。

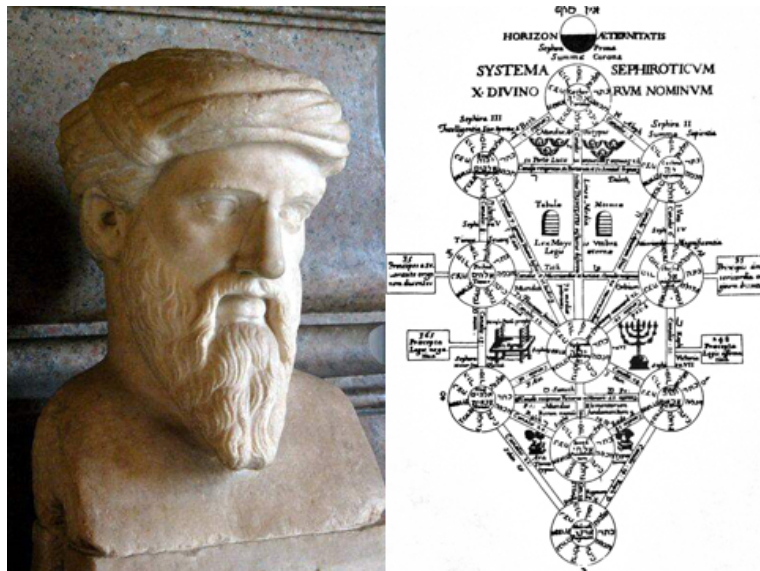
特に**古代エジプト**には確実にあった。



紀元前の古代エジプトで数学が発展していたことは、数学史や考古学でもよく知られているが、
それだけでなく、幾何学や数字には「霊」が宿るような、時には「神」との交信にまで使われるような、
そんな神秘的な世界観を含んだ数学だったのである。

恐らく、王（ファラオ）信仰や太陽信仰の影で、
秘教とか密儀とかの類の中でそれが伝えられていた。

古代エジプトの「数は霊である」というような文化がギリシャに伝わって「ピタゴラス数秘術」ができて、ユダヤ人に伝わったものがユダヤ神秘主義の中で受け継がれ、それが後に「カバラ」となる。

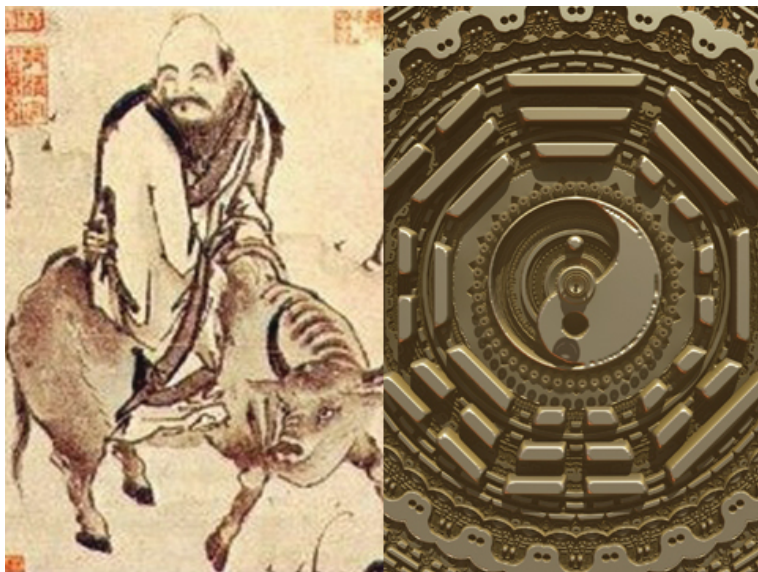


このように、「霊学」と「数学」が一体になったようなものが古代にあって、
ヌーソロジーもそれに近いような印象がある。

ヌーソロジーは、量子力学誕生以降の 20 世紀末に復活した「霊学×数学」のジャンルと言えるかもしれない。

11. 基礎用語③ ノウス(NOOS)とノス(NOS)

さて、ここで**古代中国**の話をしてしよう。



中国には陽と陰という言葉がある。

それは＋と－、正と負、光と影のように背反する性質を持つものであり、そこにある二元論は、両者が同等の力関係にあるようなものとなっている。

これが西洋の場合、二元論となると**光**と**闇**みたいになり、

光→善、闇→悪となりがちである。

天使と悪魔もそのイメージだし、神とサタンもそのイメージである。



ただ、東洋思想においては、陽と陰は絶対的な善悪どちらでもないのが本質である。

それはいわば、男と女、太陽と月みたいなものだ。

宇宙全体においてはそのどちらかが絶対的善であってはならないもので、

長い目で見るとサイクルがあるような仕組みになっている。

「陰極まれば陽となり、陽極まれば陰となる」という有名な格言が東洋思想にある。

このように物事を善悪で捉えない発想は『シリウス』のヒントでもある。

書籍『2013:人類が神を見る日』でもオコットは「**善悪という概念はプレアデスが作る概念**」と言っていて、シリウスにあるものは善や悪でなどといった概念で捉えられる働きではないと明言していた。

古代中国にもまた、シリウスに通じた知識があったのかもしれない？

中国にはこうした陽と陰を研究する「陰陽論」があり、「陰陽魚」と呼ばれる象徴的なマークがある。

これは道教のシンボルとなっているし、日本でもたまに見かける有名なものである。



陰陽のような概念で宇宙を説明するのもまた「宇宙論」と呼べるものであり、

陰陽論は東洋で身近な宇宙論と言える。

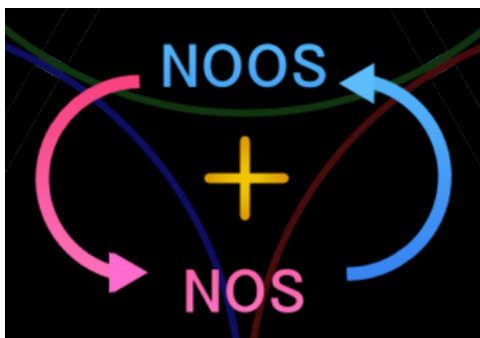
そして、ヌーソロジーもまた、それと同様みたいな宇宙論なわけである。

■ ヌーソロジーにおける根源的な陽と陰

そして、ヌーソロジーでも陽と陰みたいな概念がある。

それは、オコットが『**ノウス**』と『**ノス**』と呼んだものだ。

半田広宣さんはそれぞれ **NOOS** と **NOS** と言い換えて呼んでいる。



ノウス (NOOS) とノス (NOS) もまた、ヌーソロジーの中核となる概念なので説明する。

まずは書籍『2013: 人類が神を見る日』に出てきたものを引用しよう。

「科学はノスの力で働かされていますが、生態系はノウスの力で働かされているものです。ノスとノウスは方向性が全く逆なのです」

(中略)

「ノス………？ ノウス………？」

「あなたがたが今言われたエントロピーの正と負の関係にある力の本質のことです。性質を作り出しているものと、定質を作り出しているもののことです。あなたがたの科学技術がいくら進歩しようともそれはノスの力です。プレアデスの統制の中で働かされている限り、科学は自然を破壊していく方向にしか働かないでしょう」

これはコウセンさんとオコツトが、科学と自然の調和について会話している所で出た内容だが、まずは「科学は『ノス』、生態系は『ノウス』」ということが言われている。

次に、「エントロピーの正と負の関係にある」と言われていて、「性質を作り出しているものと、定質を作り出しているもの」と言われている。

『性質』と『定質』は前々回も出てきたワードである。

次元観察子において「オリオンからプレアデスへと向かう力の流れ」が性質で、「プレアデスからオリオンへと向かう力の流れ」が定質である。

言い換えると、地上に向かっている力の流れが性質で、オリオン向きに進化していく方向が定質ということになる。

そして、オコツトによると、ノスが性質を作り出していて、ノウスが定質を作り出してるらしい。

つまり、ヌーソロジー的に進化に向いているのはノウスの方なわけである。

そももって、「ノスは科学」に該当し、「ノウスは生態系」に該当するらしい。

ノスは地上に向かっていて、より動物的で人間的な力のようなものなので、そうした力で物質文明を強固にするように発展しているものが「科学」だというわけである。

対して、生態系や自然はオリオンやシリウスが絡んでいて、もっと超越的なものということになる。

■ 「能動的なもの」と「受動的なもの」

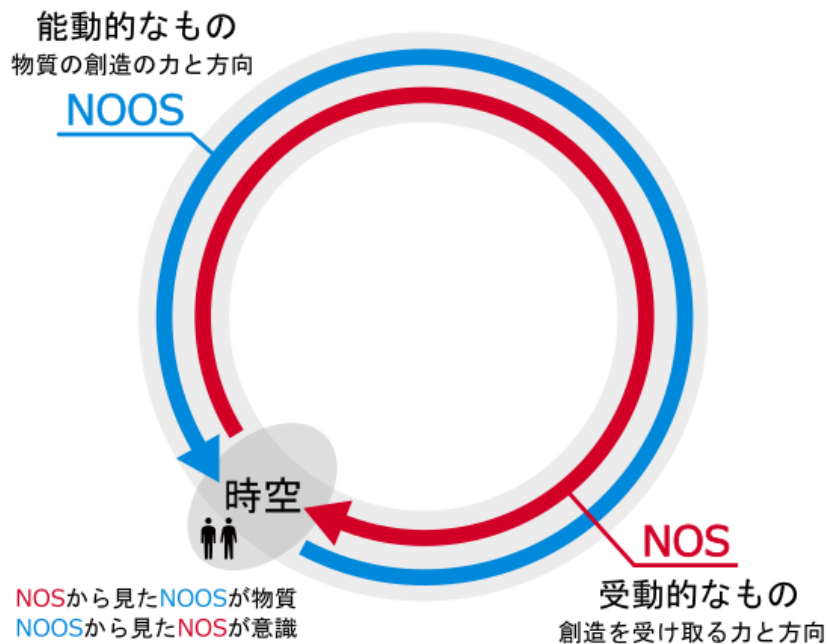
ノウスとノスは他にも様々な説明がされている。

最近のコウセンさんによる説明だと、「ノウス (NOOS) は能動的なもの」で「ノス (NOS) は受動的なもの」だというのがある。

物質を能動的に想像するものがノウスで、その創造を受け取るものがノスらしい。

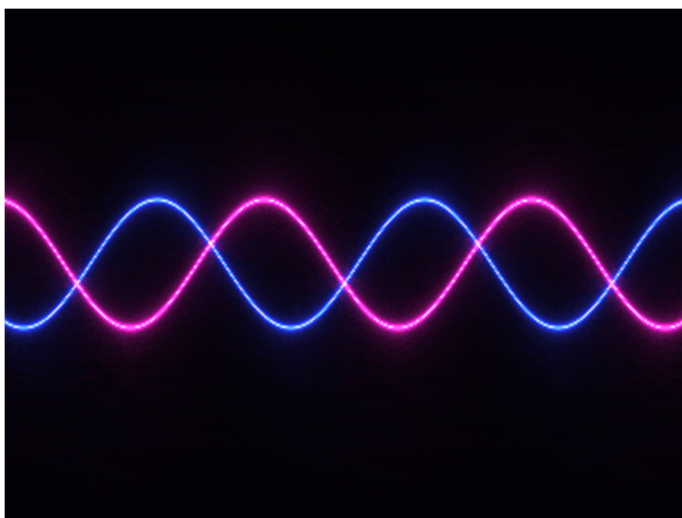
また、それぞれ色彩イメージがあり、ノウスは青、ノスは赤で描かれている。

ノウスとノスは共に動きながらも交差している位置があり、その交差位置に「時空」があり、さらに人間がいるらしい。



そうした中で、通常の人間の意識は受動的なものであるノスの方が先手になっているらしい。ヌーソロジー的に考えると、科学の発展が主流になるのはそれが理由である。

オコットが『次元観察子』として送ってきた波形図にもノウスとノスがあるため、ヌーソロジー的な宇宙のシステム（タカヒマラ）では、ノウスとノスのような「青の流れ」と「赤の流れ」が螺旋のように回転し、交差しているわけである。



〔アニメーション：二つの波が反対方向に横移動〕

■ ニューソロジー（Noosology）の名前の由来

オコットが『ノウス』というワードを伝えた時、

コウセンさんは古代ギリシャにある「**ヌース**」のことを言ってるのだと思ったらしい。

「ヌース」とは、知性・理性・精神・魂などを意味するギリシャ語であるが、

要約すると「神的知性」「霊的知性」といった意味を持つもので、

プラトンといった哲学者が重要視した概念である。

昔はこれも「ノウス（nous）」と呼ばれていたが、「ヌース」という発音に変わったらしい。

また、最近のコウセンさんの説明だと、オコットが言った『ノウス』のことを『ヌース』と呼ぶのが主流になっている。

そんな理由もあり、コウセンさんは『ノウス』のアルファベット表記の綴りをあえて『NOOS』としたらしい。

そしてこれが『**ニューソロジー（Noosology）**』の命名の元となっているわけである。



ちなみに、ニューソロジーは『ヌース理論』という名前と呼ばれていた時期もあり、略称が『ヌース』となっている。

■ 奇数と偶数

ノウスとノスは『次元観察子』にも大きく関係している。

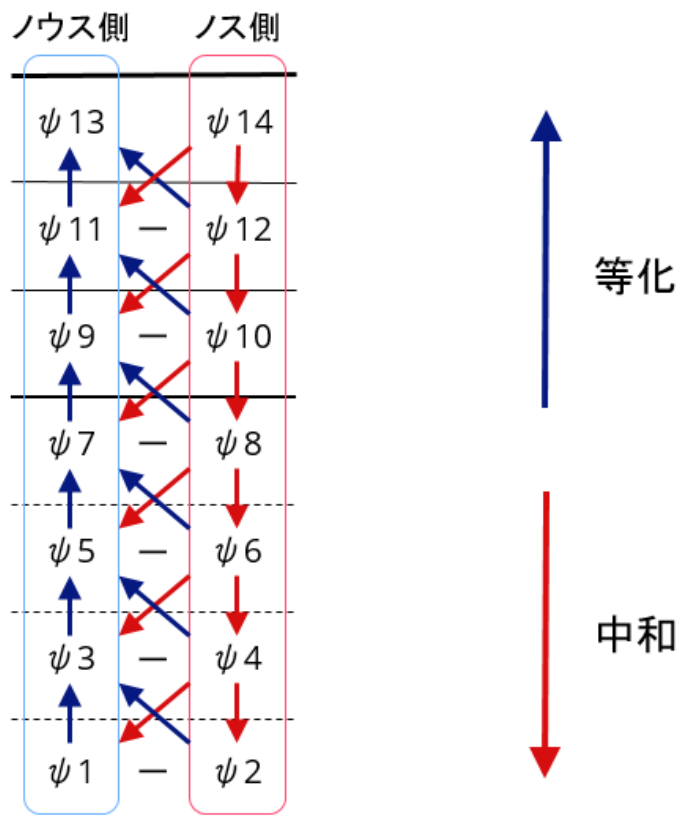
ノウスは奇数番目の力、ノスは偶数番目の力にそのまま該当する。

次元観察子を以下のような波形図で表すと、奇数番目に青の流れ（ノウス）が来て、偶数番目に赤の流れ（ノス）が来るようになっている。



また、次元観察子と『負荷・反映・等化・中和』が関係していることを、前回で説明した。
 そこで、『負荷』(1番目)と『等化』(3番目)がノウスで、
 『反映』(2番目)と『中和』(4番目)がノスに該当するのである。

つまり以下のようにになっている。



特に『等化』はノウスの力に近く、『中和』はノスの力に近い。

これらはセットで理解すると深まる関係になっている。

ノウスとノスはまるで奇数と偶数みたいな関係ということで、

これも純粋な「陽と陰」みたいな関係になってくる。

その関係に優劣といったものはないが、奇数はとんがっていて先駆者みたいな役割を持ち、

一方で偶数は必ず安定するような形になる。



〔アニメーション：奇数の多角形が回転〕



〔アニメーション：偶数の多角形が回転〕

とんがった力は『等化』、安定する力は『中和』のようなものであり、

これはノウスとノスの力にも通じている。

それらは必ず対の関係として捉えるもので、

絶対的にどっちかが善でどっちかが悪とかはない。

ただ、スピリチュアルの界限だと、中和とかノスみたいに物質的で人間的で科学的なものはネガティブに捉えられがちである・・・

ヌーソロジーも危うくそうなりがちと言えるかもしれないが・・・

実際は**どっちもアリ**なものである。

だから、ヌーソロジーをちゃんと学んでノウスとノスの関係も正しく分かるようになると、

実は何でもアリのような気がしてくる。

偶数系のものを取り込んで前向きになるものがヌーソ的思考であるし、そもそも、『等化』という概念自体がそうでないと成り立たないため、ヌーソロジーはそういう力を持つ。

また、『変換人型ゲシュタルト』も同様にそういう力を持っているわけである。

なににせよ、**奇数先手で等化していくのが意識進化の方向性**であり、

それこそがノウスの方向性となる。

そんなノウス(NOOS)の力は「能動的知性」と呼ばれたりするものであり、

ヌーソロジー(Noosology)では主にそれを追い求めていくわけである。

奇数と偶数、ノウスとノスの関係は、

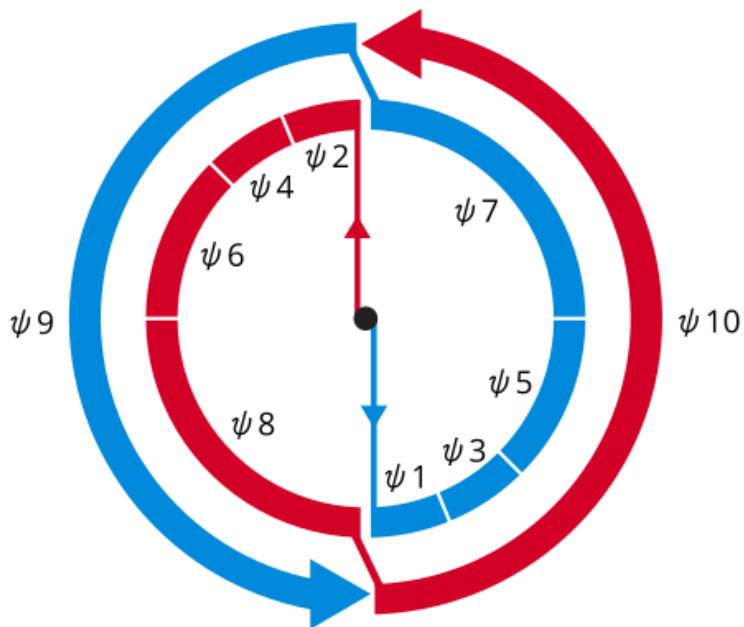
変換人型ゲシュタルトの基礎でもあるので覚えておこう。

12. 基礎用語④ ケイブコンパス

これまで「基礎用語編」ということで、
ヌーソロジー用語について主に説明してきたけど、基礎用語編は今回で最後にしたい。

『次元観察子』について、 $\psi 1 \sim \psi 14$ まであることを以前説明したが、
これは整理されていて、今は『ケイブコンパス』という図で説明されるようになっている。
(ちなみにこれは約 2000 年頃辺りにコウセンさんが編み出したものらしい。)

ケイブコンパスは以下のような形のものであり、
 $\psi 1 \sim \psi 10$ まで割り当てられているものが基本になっている。
($\psi 11 \sim \psi 12$ 以降の割り当てについては別途説明が必要になる。)



$\psi 1$ から $\psi 8$ までが内側にあり、 $\psi 9$ と $\psi 10$ は外側にある。
 $\psi 3 \sim \psi 7$ の奇数組は右側に集まり、
 $\psi 4 \sim \psi 8$ の偶数組は左側に集まっている。
あと、奇数番号は青、偶数番号は赤になっているのは、
前回の『ノウス (NOOS)』と『ノス (NOS)』の関係で説明した。

特徴的なのは、 $\psi 5$ や $\psi 7$ 、 $\psi 6$ や $\psi 8$ がだんだんと大きくなっていることである。
これは、より数字の大きい上次元は下次元を含んでいるみたいな意味を持つらしい。

それから、 ψ_9 と ψ_{10} は外側にあるのも特徴的である。
 これは、 ψ_9 と ψ_{10} は別格であるという見方もできるし、
 ψ_9 は $\psi_4 \sim \psi_8$ を裏で関与していて、 ψ_{10} は $\psi_3 \sim \psi_7$ を裏で関与しているみたいな見方もできる。

あと、ケイブコンパスについては何やらカッコよさげなムービーも作られている。

[Youtube 動画 : cave compass ver. 2011]

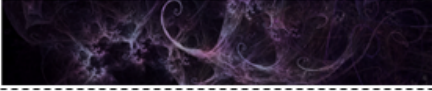
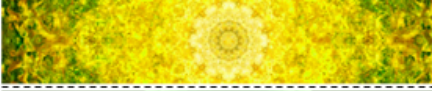
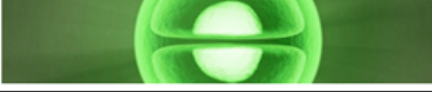
ちなみに、筆者 (Raimu) の作った図で次元観察子を整理すると以下みたいな感じになる。

ノウス側ーノス側

ψ_{13} (ψ_{14})	人間の観察精神(とその反映)
$\psi_{11} - \psi_{12}$	人間の定質と性質
$\psi_9 - \psi_{10}$	人間の思形と感性
$\psi_7 - \psi_8$	意識進化と時空
$\psi_5 - \psi_6$	自己と他者
$\psi_3 - \psi_4$	主体と客体
$\psi_1 - \psi_2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)

こういう図でも整理できるけど、
 公式が重要視しているのはさっき挙げたケイブコンパスの形なので、これについて説明する。

■ 「 $\psi 1 \sim \psi 8$ 」にある二つの方向性

	$\psi 1 \sim \psi 2$	第一層	← now
	$\psi 3 \sim \psi 4$	第二層	
	$\psi 5 \sim \psi 6$	第三層	
	$\psi 7 \sim \psi 8$	第四層	
	$\psi 9 \sim \psi 10$	第五層	
	$\psi 11 \sim \psi 12$	第六層	
	$\psi 13 \sim \psi 14$	第七層	

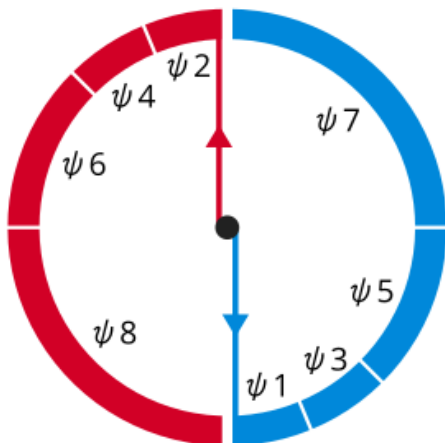
以前にも書いたことだが、現在、我々のいる位置は $\psi 1 \sim \psi 2$ である。

それを『等化』すると $\psi 3$ になり、『中和』すると $\psi 4$ になる。

さらに $\psi 3$ と $\psi 4$ を等化すると $\psi 5$ になり、さらに中和すると $\psi 6$ になり・・・とやっていき・・・

ひとまず、 $\psi 8$ までで一旦区切りがある。

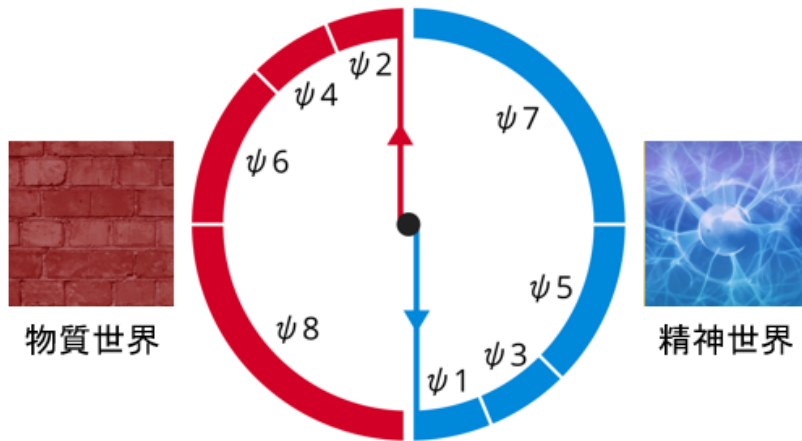
ケイブコンパスだと内側に位置する段階までのものである。



そして、この図の左側にある観察子は物質を強固にするもので、

右側のものは精神を強固にするものとなっている。

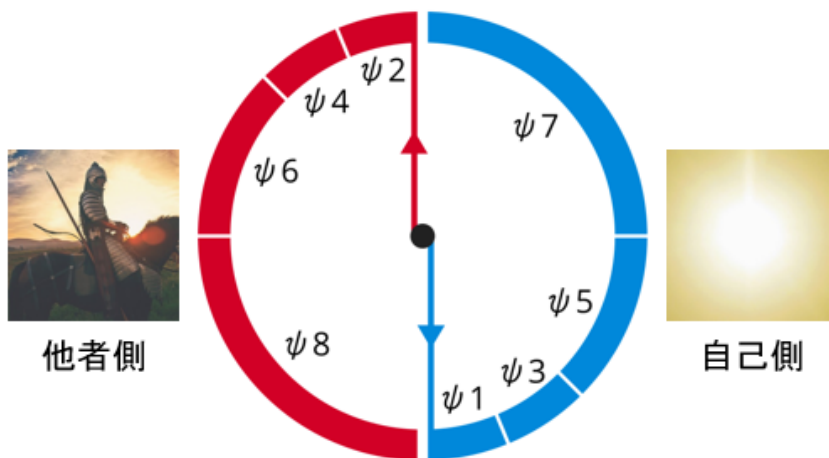
いわば、左側は物質世界、右側は精神世界という対応になっている。



何故ならば、これも奇数と偶数の関係だからである。

奇数の一群 $\psi 1, \psi 3, \psi 5, \psi 7$ は『ノウス (NOOS)』側なので、霊性進化的なものの要になっていて、偶数の一群 $\psi 2, \psi 4, \psi 6, \psi 8$ は『ノス (NOS)』側なので、地上の力を強めるものとなる。「科学」も概ねそっち側の意識をベースに作られているわけである。

あと、「自己×他者」問題との絡みだと、
右側は自己側で、左側は他者側に該当する。



これもまた重要なことであり、奇数系の $\psi 1, \psi 3, \psi 5, \psi 7$ へ進んでいくと、どんどん「自己」が深まって行くようになり、

逆に、偶数系の $\psi 2, \psi 4, \psi 6, \psi 8$ へ進んでいくと、どんどん「他者」として強くなるような意識になってくる。

したがって、奇数系の先には以前に説明した「**Sprit Self**」のようなものがあり、偶数系の先には「**他者化**」がある。

さらに、最近のヌーソロジーでよく使われるのは「奥行き」と「幅」というワードで、
「自己」のある奇数系の精神世界は「奥行き」の世界で、逆にどんどん他者化していく偶数系の物質世界は「幅」の世界だとも言われている。

『人間型ゲシュタルト』だと偶数系である左側しか認知できないが、
『変換人型ゲシュタルト』では奇数系である右側を認知しつつも、
対の関係があることを意識し、次元観察子を『等化』していくのがヌーソロジーでやっていくことである。

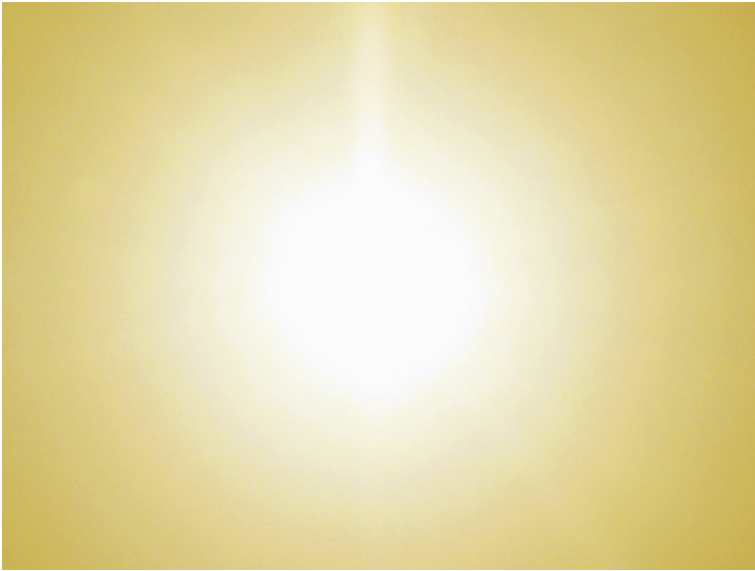
まとめると、[奇数系・ノウス(NOOS)・負荷と等化・精神世界・自己側・奥行き・変換人型ゲシュタルト]
と、
[偶数系・ノス(NOS)・反映と中和・物質世界・他者側・幅・人間型ゲシュタルト]が、 $\psi 1 \sim \psi 8$ において強くリンクしていることを覚えておこう。

■ 「元止揚」について

こうした次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 8$ までは人間たちの空間認識を作っている次元で、
『元止揚』と言う名前が付いている。
これもオコツトが言ったヌーソロジー用語だ。
元止揚が作っている空間は『元止揚空間』と呼ぶ。

ひとまず $\psi 1 \sim \psi 8$ が正確に分かれれば、ほとんど変換人型ゲシュタルトを理解したも同然である。
これは基盤の部分なので、まだ先の概念はあるけど、基盤を理解するだけでもかなりのことが分かるし、
その先の理解の目処も立ってくるわけである。

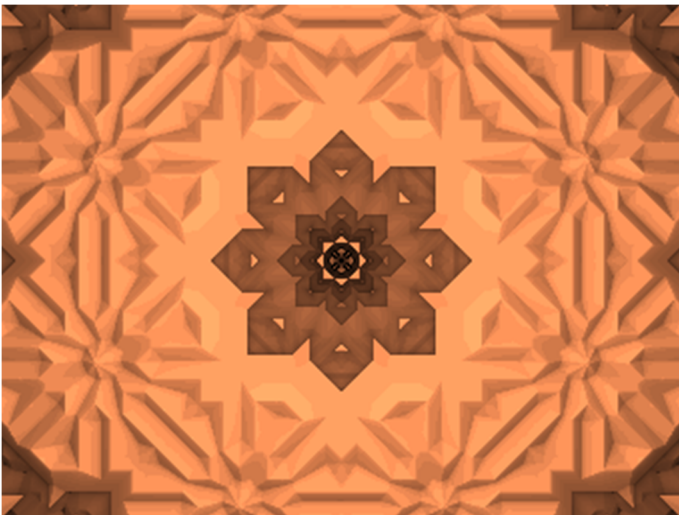
あと、実践的には『次元観察子 $\psi 5$ 』まででも十分な成果がある。
 $\psi 5$ はオコツトが「**自己が形成されている空間領域のこと**」と言っているため、
「自己」の発見に大きく関係している。
「Split Self」の感覚も、そこまでやればそこそこ掴めると言っても良い。



次元観察子は全部で「14」あり、区切りとなるのは「8」となる。
あるいは、13～14 番目は特別とすると、「12」で区切りがあるとも言えるかもしれない。
大体、この辺りが宇宙にとってキーとなる神聖な数字である。

特に「8」は人間にとって重要な数だと言うことができる。

古事記に登場する八尋殿や、空海の胎蔵界曼荼羅における中台八葉院、
スサノオが対峙したヤマタノオロチ（八岐大蛇）に、八百万の神・・・
神話や伝説によく「八」が出てくるのも何か意味があるのかもしれない。



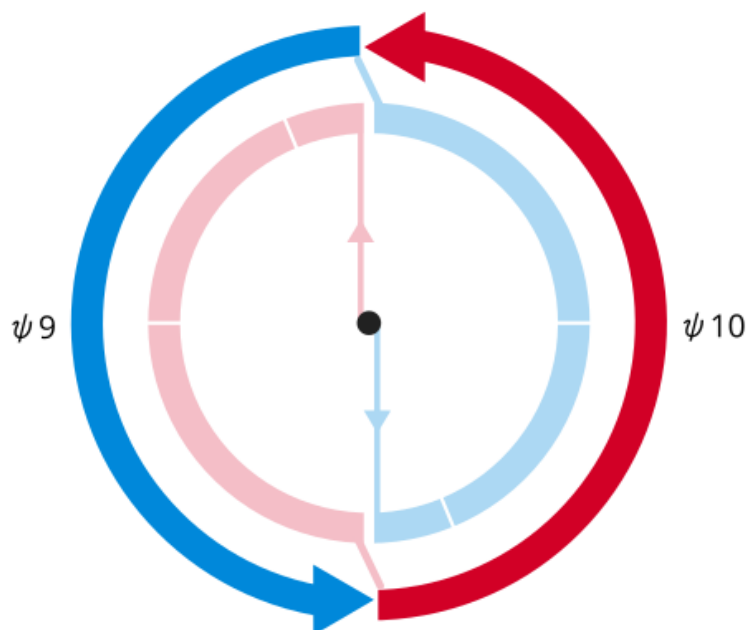
〔アニメーション：「八」の世界を進む〕

古代グノーシス主義の神話によると、
この宇宙を創造したのは名前を持たない至高神だが、
人間の世界を創造したのは「デミウルゴス」という別の存在だと言われている。

このデミウルゴスが創造したのは「八」までの世界？と言えるかもしれない。

■ 人間の「思形」と「感性」

次に、 $\psi 9$ と $\psi 10$ についてである。



$\psi 9$ と $\psi 10$ に行くと、

『思形』と『感性』というワードが出てくる。

$\psi 9$ は『人間の思形』、 $\psi 10$ は『人間の感性』と言われているからである。

『思形』と『感性』は $\psi 9$ と $\psi 10$ だけでなく、もっと広義な意味を持つものでもある。

『思形』は「思考」の「思」と、「形成」の「形」の言葉が使われてるので、思考や理性を使って何かを形作る力みたいな・・・そんな意味を持っている。

一方で『感性』はそのまま日本語の「感性」という理解もできるけど、思形とは違って感受性を用いるような、フワフワした掴み処のない力みたいな意味を持っている。

『思形』は男性的な力、『感性』は女性的な力であるため、この二つは男性原理と女性原理にも関係している。



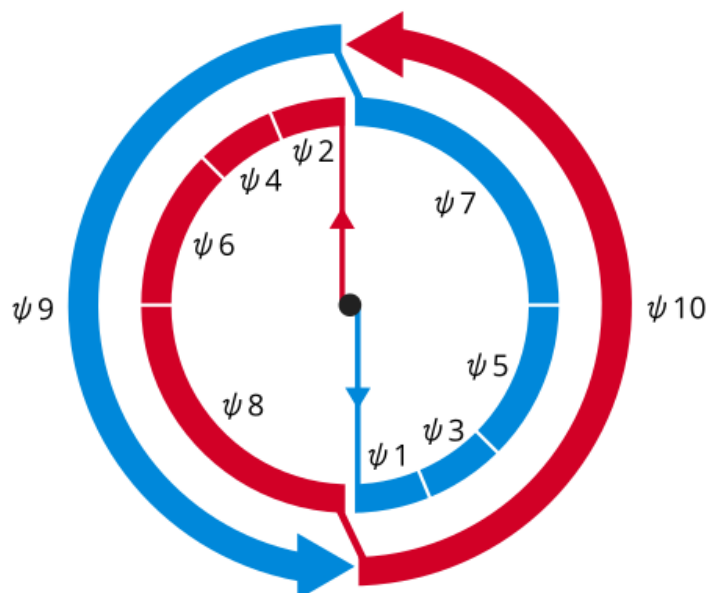
また、『 $\psi 9$ ：人間の思形』は「言語」を作っているものであり、
『 $\psi 10$ ：人間の感性』は「感覚」を作っているものであるため、
「言語」と「感覚」の対のワードと合わせて理解していこう。

「普段の我々は意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。」

・・・ということを以前に書いたが、

「言語」はさらにその影響力を強固にしていくものである。

これは『思形（ $\psi 9$ ）』がケイブコンパスで左側にあることと関係している。



偶数の観察子の一群 $\psi 2, \psi 4, \psi 6, \psi 8$ は、人間の意識を「他者先手」にするものであり、
 $\psi 9$ は裏でそれを支えるような形になっている。

その観点からすると、言語は非常にノス的で地上的なものとなり、意識進化の方向性とは異なるものにな

る。

奇数（ノウス）の番号を持ちながらも、偶数（ノス）の力を持つのが『 $\psi 9$ ：人間の思形』ということになるわけである。

しかしながら、動物を人間に進化させたのも言語であるし、
幼児が成人に進化するのにも言語が必要である。

あるいは、人間は成人になっても言語が正しく扱えてるかどうかは怪しいもので、ちゃんとした習得が必要なこともよくある。そういうシチュエーションの場合は言語の力は進化の方向へと行く。

これは奇数系の観察子（ノウス）としての『思形』の力である。

いわば、人間の意識が幼児のような段階だったりすると、『思形』はノウスとして機能するわけである。

ただ、言語を受動的に使うようになると偶数系（ノス）として作用してしまう。

『思形』とノスの関係もまた、そういう仕組みと関係している。

『思形』はそんな二面性を持つ概念だと理解しておこう。

もう一方である『感性』も同様で、

『人間の感性』の観察子の番号は $\psi 10$ （偶数）だが、

$\psi 1$, $\psi 3$, $\psi 5$, $\psi 7$ を裏で支えているので、奇数系（ノウス）の力を持っていることになる。

したがって、これも二面性を持っているような概念である。

以上。ケイブコンパスで『思形』と『感性』が外側にあって、
ノスとノウスの関係がねじれていることについてよく理解しておこう。

■ 人間の「定質」と「性質」

さらに、 $\psi 11$ と $\psi 12$ に行くと、

『定質』と『性質』というワードが出てくる。

これは以前にも説明したヌーソロジー用語である。

$\psi 11$ は『人間の定質』、 $\psi 12$ は『人間の性質』と言われている。

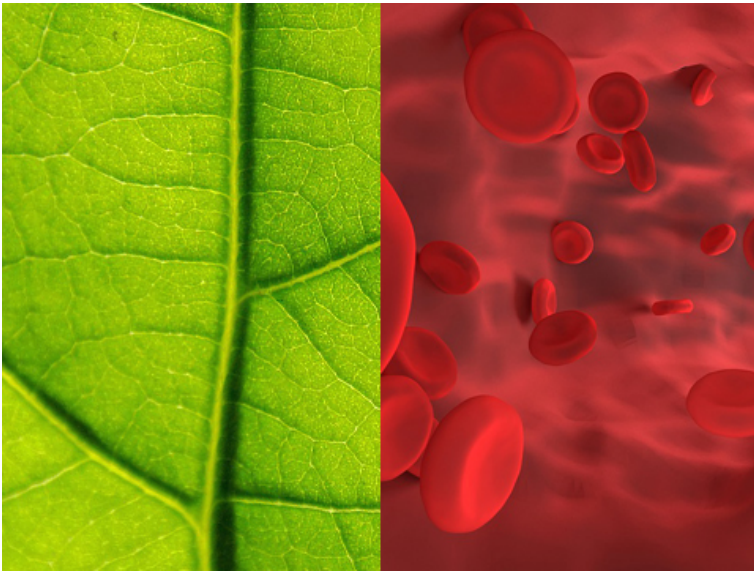
これは以前に出てきたものと似ているが、

正確に言うとう違うものらしい。

しかし、 $\psi 11$ と $\psi 12$ はほとんど次元観察子の最高位みたいなものなので、
次元観察子自体のノウスとノスを統括しているような力になる。

したがって、 $\psi 11$ は「次元観察子内でプレアデスからオリオンへと向かう力」で、 $\psi 12$ は「次元観察子内でオリオンからプレアデスへと向かう力」だと言うことができる。

『思形』と『感性』は「男性原理」と「女性原理」が関係しているように、
『定質』と『性質』は「植物」と「動物」が関係しているらしい。



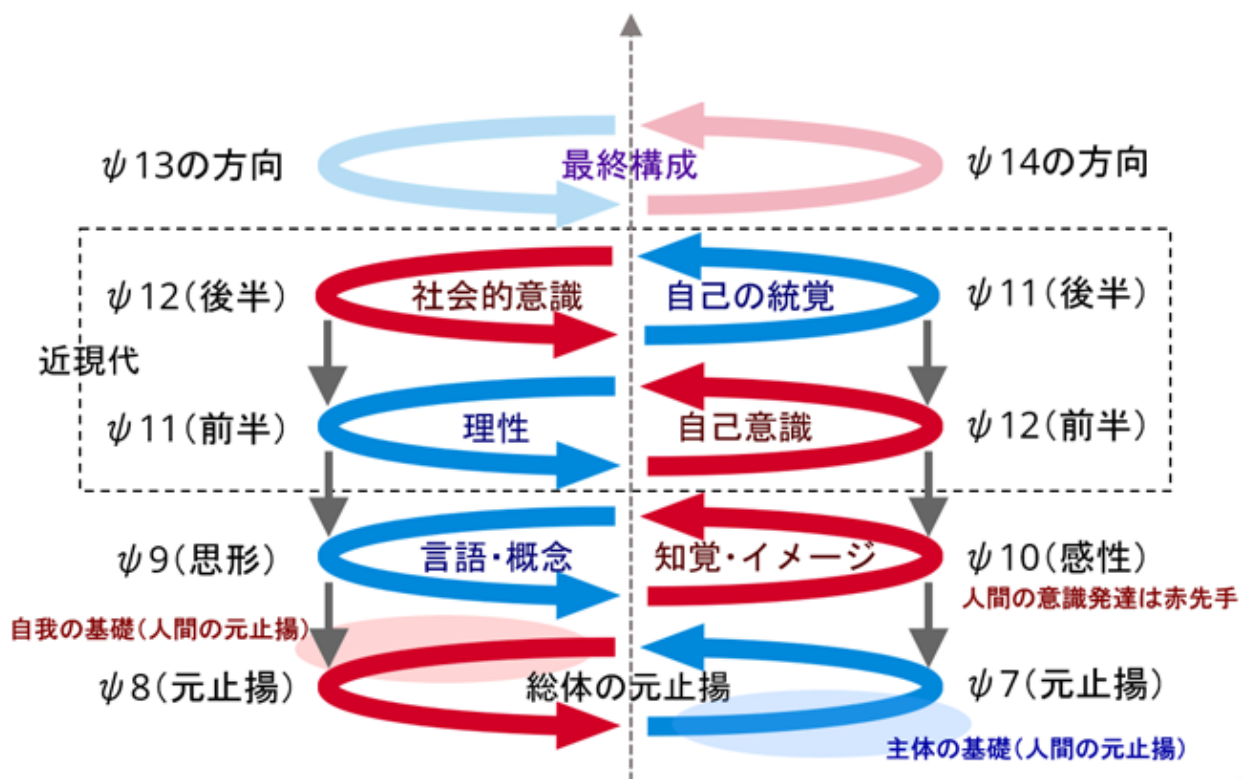
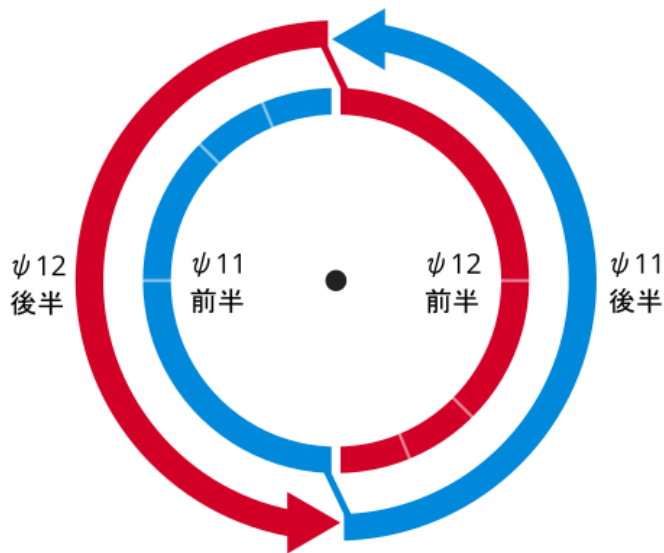
生態系（ノウス）は植物の意識が元で発展するものであり、それが『定質』を作り出す。
科学（ノス）は動物の意識が元で発展するものであり、それが『性質』を作り出す。
・・・と解釈することもできる。

あと、『思形』と『定質』も関係していて、
『定質』は言葉を作り出すものと関係があるらしい。
以下、オコツトとの対話録「シリウスファイル」にあった情報である。

「思形とは言葉を送り出すところ、定質とは言葉を作り出すところ。合ってますか。」
「はい、そうです。」
——シリウスファイル 19900910

以上が『定質』と『性質』の理解の為のヒントである。

それから、『ψ11:人間の定質』と『ψ12:人間の性質』には前半と後半があり、
ケイブコンパスに割り当てると以下のような形になる。



この辺を掘り下げると色々な話が出てくるけど、
上級編ということで後回しで良いかな・・・

先に変換人型ゲシュタルトの理解を進めていきたい。

■ 次元観察子のまとめ

今回出てきた用語と、次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 14$ で絡む概念をまとめると以下のようなになる。

$\psi 13$ ($\psi 14$)	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11 - \psi 12$	<u>人間の定質と性質</u>	中性質
$\psi 9 - \psi 10$	<u>人間の思形と感性</u>	調整質
$\psi 7 - \psi 8$	意識進化と時空	} <u>元止揚</u>
$\psi 5 - \psi 6$	自己と他者	
$\psi 3 - \psi 4$	主体と客体	
$\psi 1 - \psi 2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

もっと詳細をやると、 $\psi 9 \sim \psi 10$ に『調整質』とか、 $\psi 11 \sim \psi 12$ に『中性質』といった名前がついていたり、 $\psi 13$ と $\psi 14$ についてとか、もうちょっと説明したいことがあるのだが・・・

あんまり内容を詰め込み過ぎると頭がこんがらがるので止めておこう。

とりあえず、『元止揚』『思形』『感性』『人間の定質』『人間の性質』について説明したので、最低限この辺のワードだけでも覚えておこう。

13. 基礎用語のおさらい

『変換人型ゲシュタルト論』の基礎用語編を①～④までやった。

とりあえずこれでニューソロジーの基礎知識については一通りできたということで完了としよう。

ここで「ニューソロジー用語」についてのおさらいをする。

ここまでで以下のニューソロジー用語が出てきた。

プレアデス、シリウス、オリオン、
最終構成、変換人、人間の内面、人間の外面、
次元観察子 ψ 、定質、性質、反性質、反定質、
負荷、反映、等化、中和、対化、ペンターブ・システム、
ノウス (NOOS)、ノス (NOS)、
ケイブコンパス、元止揚、思形、感性、人間の定質と性質

(5) で出てきたものは以下。

・ プレアデス、シリウス、オリオン

(6) で出てきたものは以下。

・ 最終構成、変換人

(7) で出てきたものは以下。

・ 人間の内面、人間の外面

(9) で出てきたものは以下。

・ 次元観察子 ψ 、定質、性質、反性質、反定質

(10) で出てきたものは以下。

・ 負荷、反映、等化、中和、対化、ペンターブ・システム

(11) で出てきたものは以下。

・ ノウス (NOOS)、ノス (NOS)

(12) で出てきたものは以下。

・ ケイブコンパス、元止揚、思形、感性、人間の定質と性質

それぞれの用語の意味が分からなくなったらまた復習しよう！

■ 「ニューソロジー基本概要＋（プラス）」のワード

もちろんニューソロジー用語はまだまだたくさんあるし、

基本概念に該当するものももうちょっとある。

例えば、次元観察子 ψ 1～ ψ 14 より上位に大系観察子 Ω 1～ Ω 14 があることや、

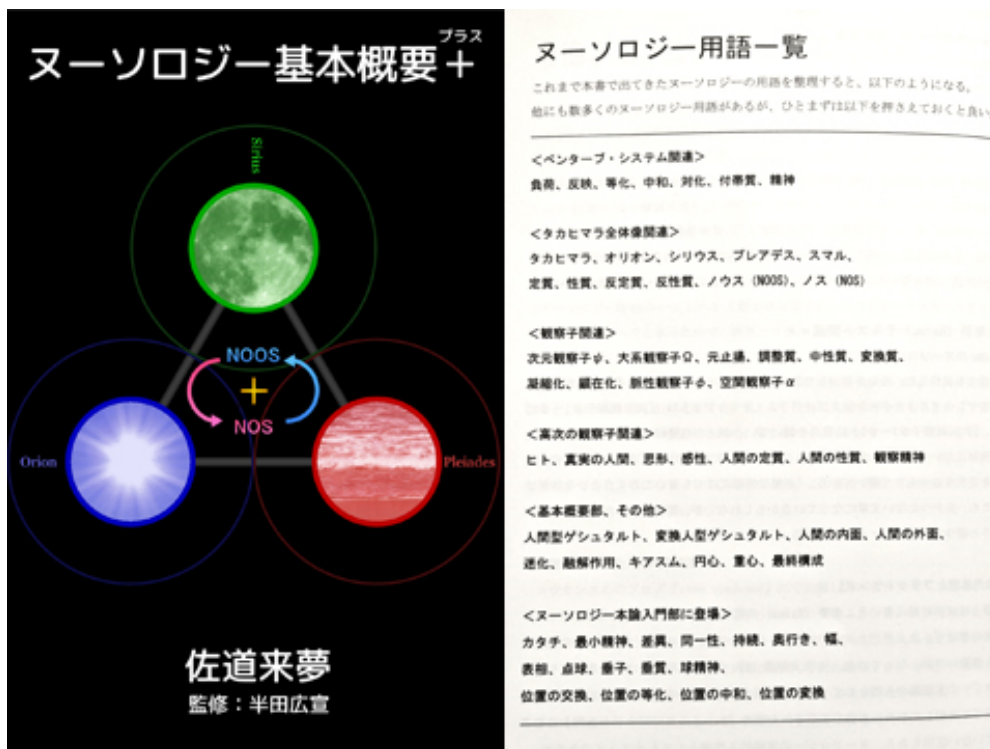
ψ と Ω の関係についてはここでは説明していない。

その辺も本当はやりたい所だが、『変換人型ゲシュタルト』で早速出てくる概念ではないのでとりあえず飛ばすことにした。

他にも別の機会に説明したい概念がいっぱいある。

筆者（Raimu）の書籍『ニューソロジー基本概要＋（プラス）』では、

本の最後の方に以下の用語についてが書かれている。



負荷、反映、等化、中和、対化、付帯質、精神

タカヒマラ、オリオン、シリウス、プレアデス、スマル、

定質、性質、反定質、反性質、ノウス（NOOS）、ノス（NOS）

次元観察子 ψ 、大系観察子 Ω 、元止揚、調整質、中性質、変換質、

凝縮化、顕在化、脈性観察子 ϕ 、空間観察子 α

ヒト、真実の人間、思形、感性、人間の定質、人間の性質、観察精神

人間型ゲシュタルト、変換人型ゲシュタルト、人間の内面、人間の外面、

迷化、融解作用、キアスム、円心、重心、最終構成

カタチ、最小精神、差異、同一性、持続、奥行き、幅、

表相、点球、垂子、垂質、球精神、

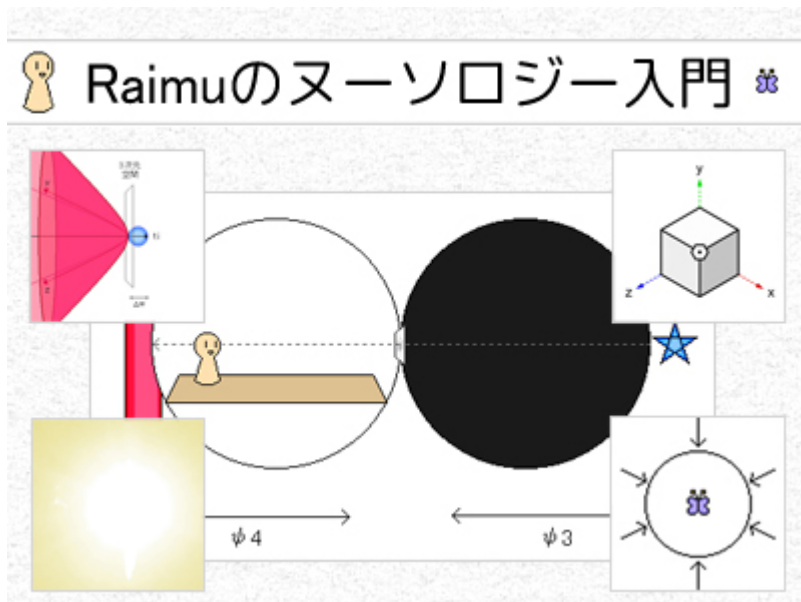
位置の交換、位置の等化、位置の中和、位置の変換

ここでもニューソロジーの基礎となる用語が一通りまとまっているので、気になる人はそっちも参照して欲しい。

あと、『Raimuのニューソロジー入門』では、

これらの用語も漏れなく取り扱っているので、より詳しく知りたい人はそっちを読むのも良いと思う。

[リンク：Raimuのニューソロジー入門]



■ 「シリウス革命」のワード

現存で情報量の多い代表書籍といたら『2013:シリウス革命』である。



『シリウス革命』に載っていて、『ニューソロジー基本概要+（プラス）』に載っていない用語もいっぱいある。

以下のあたりがそれである。

妙性、感性作用、推進方因、次元の交替化、対化の交差、
次元等化、付帯質の変成、点意志、止核作用、精神の中和、
反環、重性、核心、本因、真因、重形、観察化、
プレアデスの内面と外面、シリウスの内面と外面、
顕在化の内面と外面、タカヒマラにおける内面と外面、
力の変換、力の転換、力の等換、
位置の開花、位置の等換、位置の融和、
形質、核質、脈質、次元核、妙性質、完全性質

これらの用語について全部やっているとキリがない。

そもそも、『シリウス革命』を読んでいる限りだと、ヌーソロジーには膨大な情報がある。
こうして膨大な情報がある中、どうにか必要な情報に絞ってまとめねば・・・と5年以上かけて出来上がったのが、筆者（Raimu）が書いた『ヌーソロジー基本概要+（プラス）』という書籍だった。
とりあえず、そこに出てくる用語を押さえておけば、
ヌーソロジーの基本的な話は一通りできると思う。

ちゃんとした学習のためには、『2013:シリウス革命』に出てくる難しい用語であまり混乱しないように、
『変換人型ゲシュタルト』の習得にまずは集中した方が良いと思う。

とはいえ、「**形質**は意識のカタチを作り上げていく力」とか、「**妙性質**は人間のこと」とか、「神とは**重心**であり、力を持たないもの」とか、「鉄は人間型ゲシュタルトの本質であり、人間が持った**次元核**に相当する」とか、「日本人は今の人間の**核質**である」とか・・・
その辺の用語について考えてみるのも面白いんだけど・・・
それはそれで好きにして良いと思うし、
基本を理解した後に『シリウス革命』の未知のワードに読むと、
新たな発見があってそれはそれで面白いと思う。

なににせよ、ヌーソロジー学習に最低限必要な基礎用語はここまでで一通り押さえることができたということで、
いよいよ『変換人型ゲシュタルト』の本格的な学習に入っていこう。